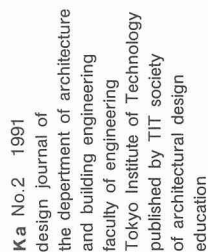


論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	No. 2
発行日 / Pub. date	1991, 4
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。



編集：東京工業大学工学部 建築学科
建築計画第2講座
発行：TIT建築設計教育研究会
定価：400円



Ka

NO. 2 1991

Sapporo School of the Arts : Kiyosi Seike

1990年度設計検定第Ⅳ(3年生)優秀作品より—2
1990年度安業制作・修士制作優秀作品より—14
岡山建築賞創設—14
生だった頃：清水清—18
—マ：志水英樹—19
—から—

加藤静から「都市開発計画論」をめぐって——22
 ですか《藤江達夫さん、西村博司さんを訪ねて》——24
 総記 シュテデル・シュレートの1年：持田英明——26
 世界大生事情：藤野雅航——27
 INFORMATION——28
 ことで、訓でハナとシメ、
 言を示す「手」があらわ
 ム数に「かた」がある。重要なのは「子(う・く)」「
 と区別して、まさに難題・難問
 した学生をよりよく
 いて、本邦

「生れた」(ワグネルの「ワグネル」)、「宇宙」(ジャコブ)の二つとも大膽な形を呈し、これからの情報化社会、国際化に育つことが求められよう。

Our department has maintained a solid and dignified academic tradition since its establishment in 1902 when Japan was the first to put this name 'Ka' to this journal. The KANJI reading of 'Ka' means a large showy flower such as a tree peony or a herbaceous peony and the word has connotations of magnificence and grace (Akira Nakio).

閱覽用

1990年度設計製図第Ⅳ(3年生)優秀作品より

Outstanding works by the juniors of 1990

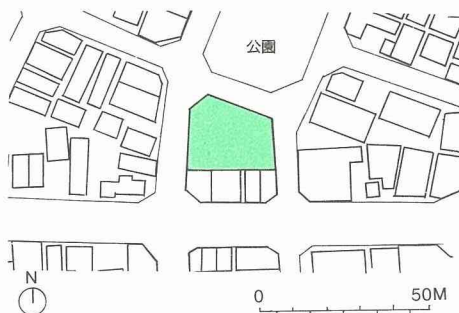
ここに紹介するのは東京工業大学建築学科での1990年度後学期の「設計製図第Ⅳ」(3年生対象)の3課題の優秀作品の一部である。

前号で紹介した「設計製図第Ⅲ」の3課題に続く本年度の「設計製図第Ⅳ」の課題は、

長谷川逸子講師出題の「プチ・ホテル」、八束はじめ講師出題の「最大限住宅」、林昌二講師出題の「都市の複合施設」であった。

「プチ・ホテル」

Petit Hotel



●設計製図第Ⅳ：第1課題 長谷川逸子講師

10月2日～11月1日

●課題要旨

板橋区立駅前公園に面する440m²の敷地(建蔽率80%、容積率480%)に、45室以上の客室、ロビー、レストラン、バー(喫茶)、駐車スペース2台などを含む小ホテルを計画する。

●指導協力

構造/瀧口克己 設備/後藤守一

講評

長谷川逸子

この20年程、非常勤講師として学生の設計教育に関わりをもってきたが、90年代に近づく頃から、多分新しい科学技術の実用化が急速なためだろうが、社会の変化と動きが加速化すると同時に複雑化が進む中であって、その社会状況とこの大学の設計教育との遊離が感じられてならない。建築設計そのものが、もはや狭義な専門的内容だけでは対処しきれなくなっている。大学では、そういう状況に対応することもなく、人材の建築業界離れをくい止めんがために、卒業と同時に即戦力となるような方向をとる傾向にある。それは設計のおもしろさを失うことにつながり、結果的には人材を失うことになるのではないか。

建築は世界や宇宙とつながってあるものであり、人びとが生活する中で経験してきた豊かであるが半透明な情感から宇宙の不可思議さまで広がるものであろう。そうした建築の在り方を、この時代の若々しい敏感な感性をもって考え、新しい時代に向かうための建築を提案していく役割を担うことが大学の設計教育であって良いのではないかと私は思う。

課題は昨年と同様、板橋に実際に計画するホテルとした。現実には私が手掛けているからといって、その実現化のための対応を考えてはいなかった。都市の建築、あるいは都市という場所性を考えることがテーマであった。

昨年は、この東京というさまざまな様相が重層する都市空間と、そこに宿泊するための機能との関係を考えていろいろな提案、また敷地がもつ場所性を積極的に見つめ連続させた提案など挑戦的であるだけでなく、実現し

てみたいようなものがあつた。今年は目立って優秀なものは少なかったが、その中でもここには掲載されないが、渡瀬さんと陸さんの案で、東京の都市性そのものを敷地環境の中にしみ込ませ、それをホテルとするデザインを私は評価した。

講評

山下和正

大学での課題設計は、現実とは無関係に自由で奔放な絵を面白く描けばよいという考えがある。いずれ社会に出ればそうはゆかないから今の内というわけである。これは度量ある教育方針のようであるが、実は無責任なものである。かえって建築家としての成長のための思考の連鎖を断つことになる。

空間のスケール感もつかめず、技術との折り合いも理解のないままに、いたずらに新規性を追い求め、実現不可能なイラスト遊びを助長することは、学生の将来の発展をゆがめることになるのではないか。優れたデザインは、敷地を良く読みとり、技術を十分に取り込むこと、即ち実現性を前提とすることと矛盾するものではない。むしろそれらの条件がデザインに彩りを添え、場合によっては発想のキーポイントになることもあり得るはずだ。

この課題から初めて行った構造や設備の先生方のサポートは、その主旨が十分生かされとは思われなかったが、今後とも続けることを原則としたい。ホテル・マネジメントの専門家の参加も考えたが果たせなかった。

講評

坂本一成

課題は小ホテルで扱いやすい規模のものだが、そのことがおもしろいプログラムを設定することをむづかしくさせたとも思われる。しかし全体的にはそれなりにそつなくまとめた案が多かった。

そのようななかで杉野義人作品は全体を囲み込む構成が魅力的で、発展の可能性が多い案と思われた。

谷口知史作品は全体をまとめている大いに共感をもてた。

和田茂明作品は内部の手堅い構成と外観の積極性に興味をもてた。

その他、内部と外部の空間の浸透性の高い建築を提案した長谷川巖作品、達者で技巧的な構成をつくった陸鐘驍作品、そして超現代的なシンボリズム的形態を見せてくれた渡瀬正紀作品が特に評価できた。また和田卓作品にもみるものが多かった。



長谷川逸子 Itsuko Hasegawa

1964 関東学院大学建築学科卒業

1964～69 菊竹清訓建築設計事務所勤務

1969～71 東京工業大学建築学科研究生

1971～78 東京工業大学篠原一男研究室勤務

1979 長谷川逸子・建築計画工房株式会社設立

1988 早稲田大学非常勤講師

受賞：

日本建築学会賞作品賞(1986)

湘南台文化センター公開コンペ最優秀賞(1986)

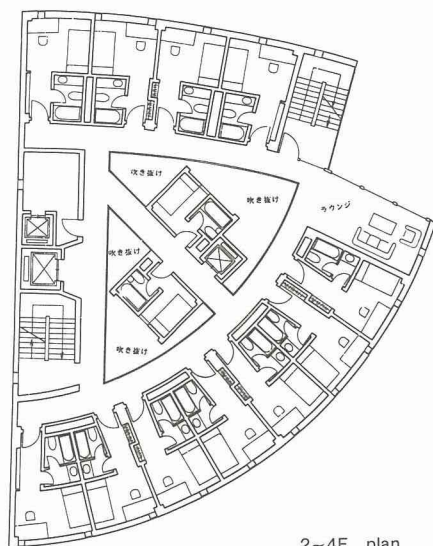
日本文化デザイン賞(1986)

ホテル

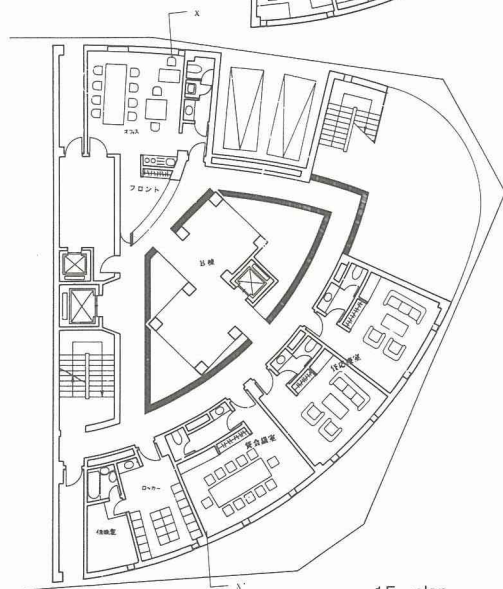
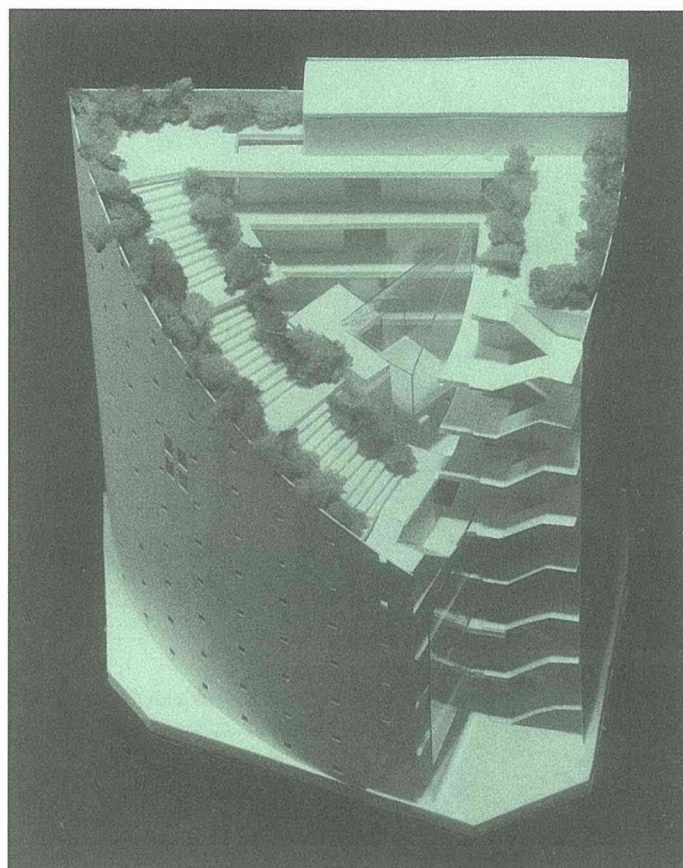
Hotel

杉野義人

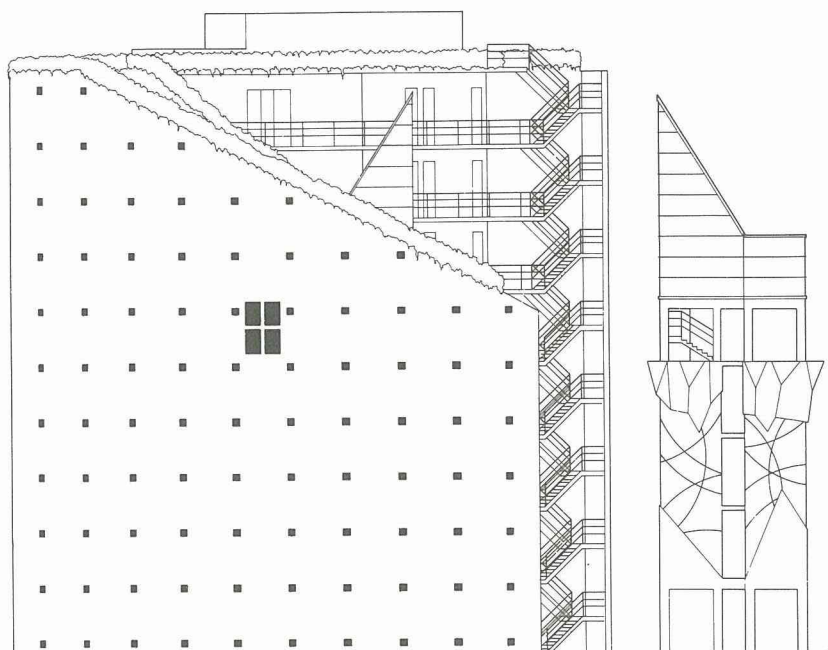
Yoshito Sugino



2-4F plan

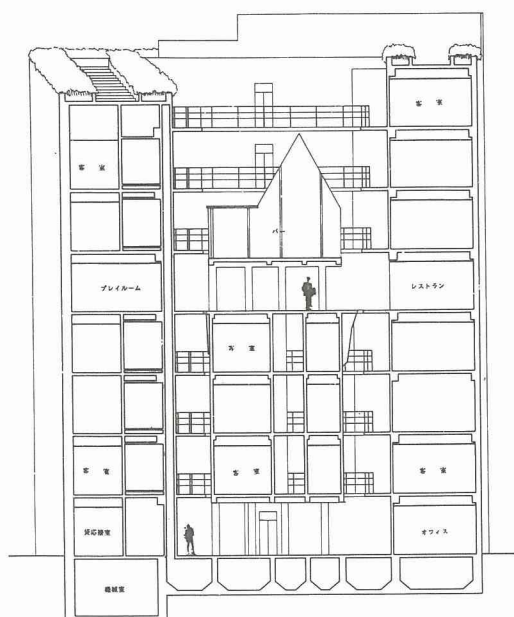


1F plan



east elevation

west elevation



x-x' section

■今回、ビジネスホテルを計画するに当たり、現代社会のビジネスマンたちの生活をふまえながら、その需要にあったビジネスホテルを考え直した結果、2種のホテルのタイプが浮かび上がった。都心の出張所を兼ねる〈オフィスコンパートメント〉型のホテル、そして昼夜を問わず働くビジネスマンのための〈仮眠室〉型のホテルである。単一のホテルとしては弱いコンセプトの両者を組み合わせることによって両方生かす工夫をした。■ホテルは、A

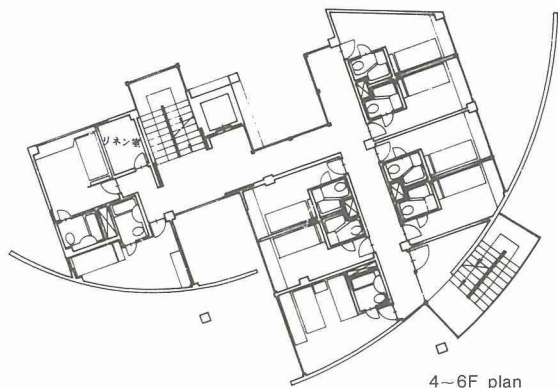
棟・B棟から成り、B棟を取り囲むようにA棟が建つ。A棟は、オフィスとホテル両方の機能を備えた〈オフィスコンパートメント〉型のホテルで、ここでは普通のオフィスと変わらないような仕事空間を提供することを目標とし、図書室、応接室、会議室などを備える。A棟に対しB棟は、ビジネスマンに仮眠スペースを提供することを目的とする〈仮眠室〉型のホテルで、部屋は時間単位で貸し出される。

ホテル

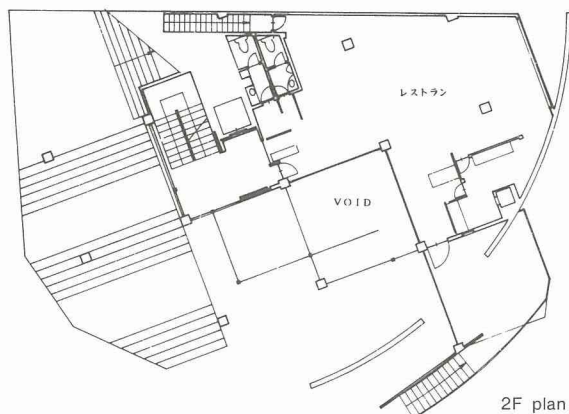
Hotel

谷口知史

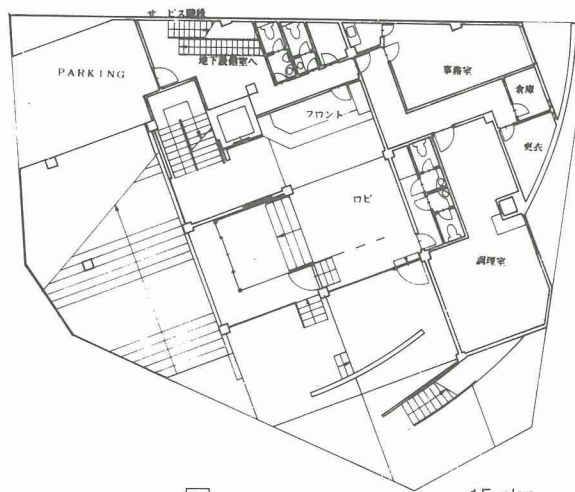
Tomobumi Taniguchi



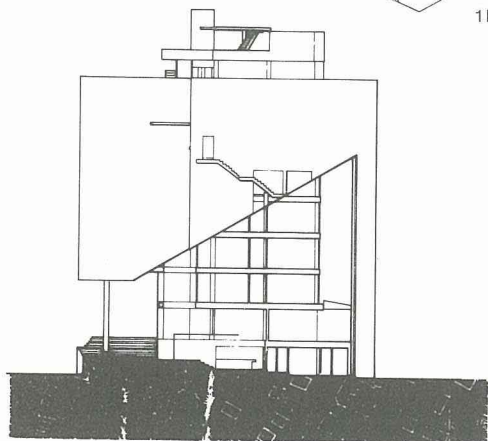
4~6F plan



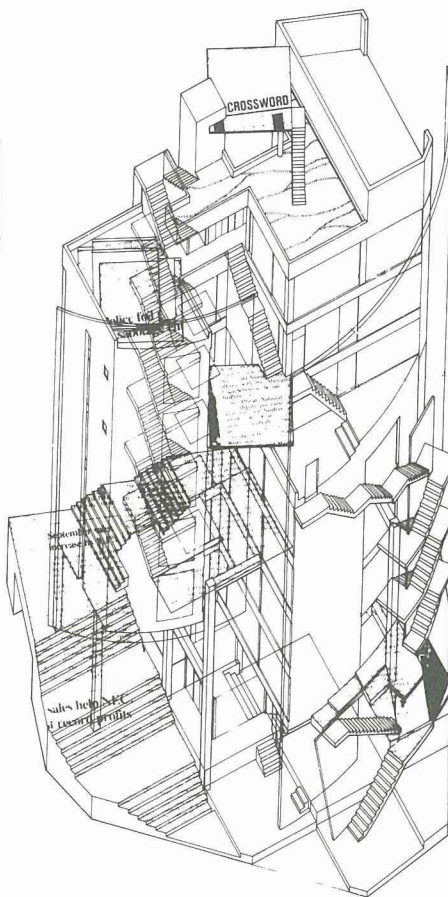
2F plan



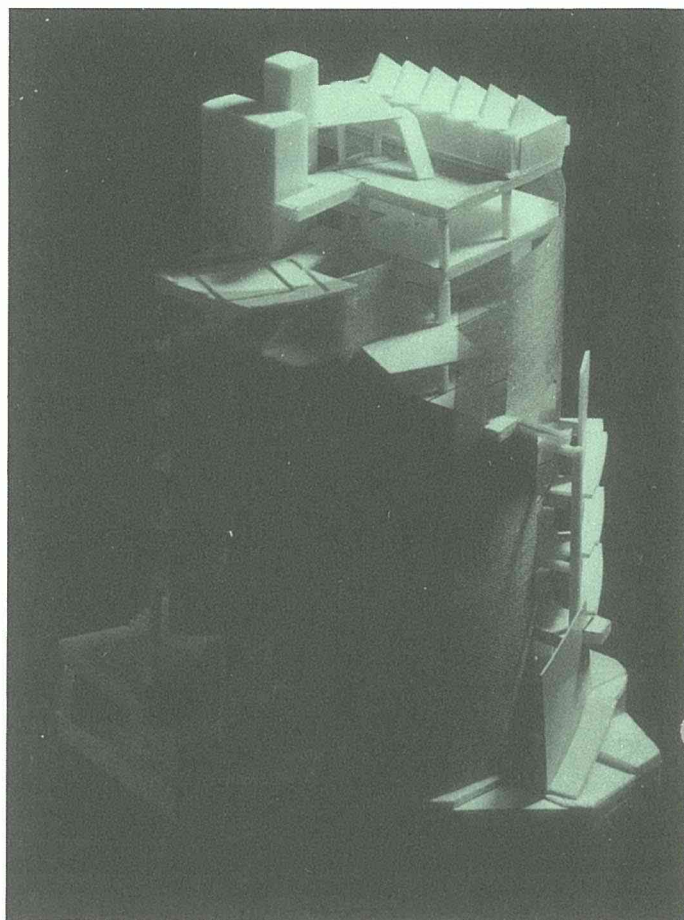
1F plan



north elevation



axonometric



■池袋からJRで北寄り、都心とも郊外ともつかぬスケールでビルが立ち並ぶ駅前空間。小さな都市公園に南接して課題のための440m²の敷地がある。

■公と閉の空間を関係づけるために、公園とホテルの間にメッシュの滑らかなファサードを挿入した。その裏表を辿って階段状のギャラリーが立ち上がり、最上部でライブラリー、小ホールに接続する。経営主は時節に合わせてテーマを決定できる。たとえばファサードを覆う一面のパッチワーク、ギャラリーをめぐる環状の展示計画。それが利用客の要望による企画であっても構わない。単なる滞在施設に止まらず、利用客とpositiveな関係が可能となる。

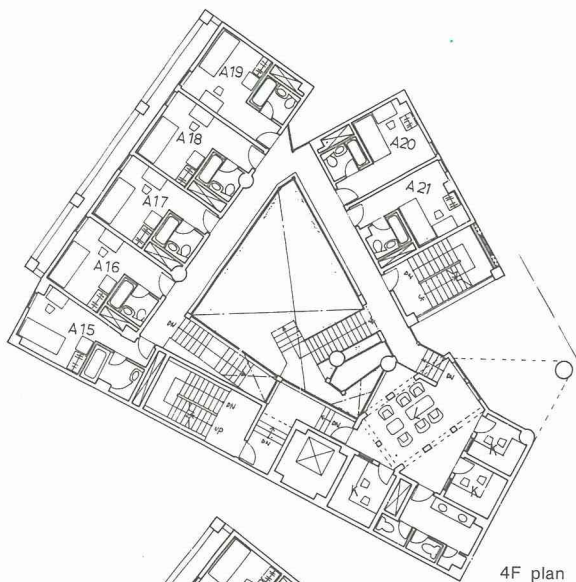
■都市化の波は電子情報となって押寄せ、私たちの眼に見えない。公園から眺めたファサードは、その波型を捉えるアンテナであり、ギャラリーに集う人々によって視覚化・演出される、一種のカンバスである。人と建造物で構成されたスクリーンに、何らかの社会的現象が映しだされるのを期待したい。

ビジネス ホテル

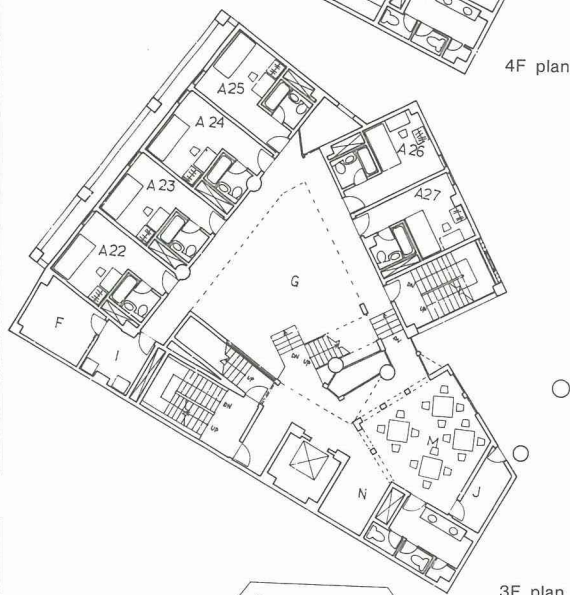
Business Hotel

和田茂明

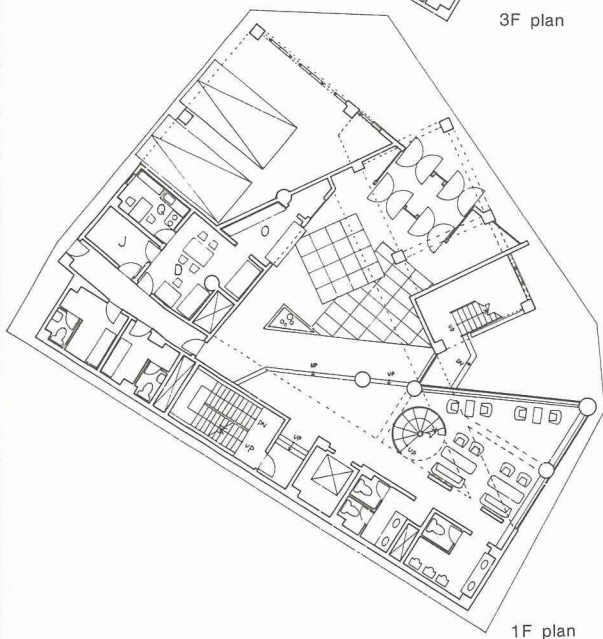
Shigeaki Wada



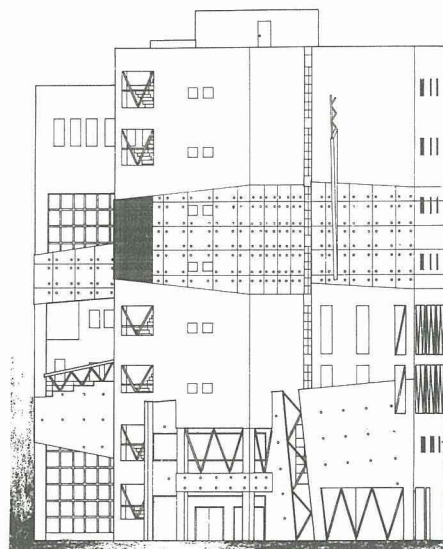
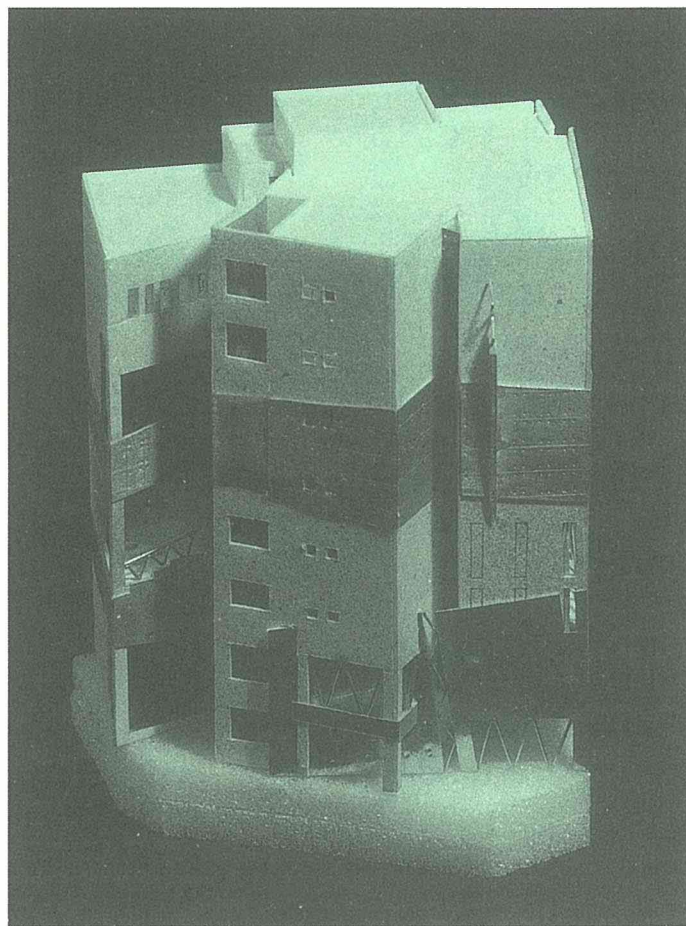
4F plan



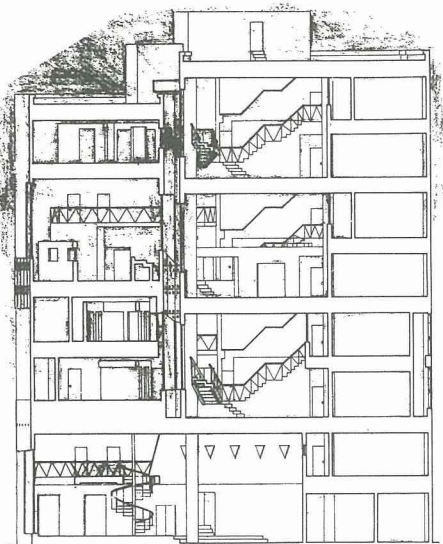
3F plan



1F plan



← elevation
↓ section



■東京へ出張で来るサラリーマンはビジネスホテルならどこでもよいとばかりホテルを予約する。その男は仕事を済ませ、地図を頼りに板橋へとやってきた。すると目に入るのがこのホテルである。「なんじゃこりゃ」——■これが今回のホテルである。このファサードを見る限りでは出入りするのを他人に見られたくないようなホテルに見える。しかし内部は違う。訳の分らない暖簾もなければボタンで部屋を選ぶこともない。板橋の住宅地域に囲まれた普通のビジネスホテルではあまりに軟弱であったための結果である。■今回の課題では内部の空間構成に重点を置いた。8層分の建物だが、エレベーターが止まるのは5層分である。全体としてみれば二層一組の吹き抜け空間に、それを共有するレストランやバーなどのパブリックスペースであるスキップフロアが、3階より上部に三層重ねられている。■これを見たサラリーマンが内部で再び「なんじゃこりゃ」と言ったらしめたものである。

「最大限住宅」

Ideal Villa

講評

八束はじめ

私の課題では、プロブレム・ソルヴィングとしての設計、もしくはプログラムは等閑視にして「形」のみを操作するデザインが今の日本では多すぎるのではないか、という問題提起から、プログラム自体を考えてもらうことからスタートするような設定がなされた。やはりこうした思考は慣れていないとみえ、最後「形」をいじくりだしてからのスピードとは対照的に、最初の段階では少なからずもたつきがみられた。こうした思考は単なる思いつきや思い込みではダメで、それなりの説得力のあるロジックが用意できないといけませんが、この点をパスできた人はむしろかなり少ない。トレーニングの問題とは思いますが、大きな弱点であることは間違いなく、これからの折りにふれてそれを考えて欲しい。でないと、建築が単なる自閉的な戯れになってしまう。とくに、仙田さんも述べられていたが、女子学生の諸君は奮起しないといけない。

優秀作の中で、陸君のはコンセプトからプレゼンテーションまで、終始抜群に達者だった。ただ、他の課題などを見ると、どうも達者すぎるところに問題もあるようで、現代の最先端のイメージやコンセプトをつなぎ合わせる手腕の鮮やかさが目につきすぎるくらいは否定できない。今後は、それを壊すところから始めないといけないかもしれない。ただ中国大陸からの留学生でこうしたタイプが出てくるというのをみると、いよいよ世界はメディアによって一つになりつつあるという感が深い。

和田君のは、プログラムをうまくつかまえ

た点が勝因である。無理なく丁寧なところが買える。ただ、設定が決まってしまってから展開に迫力が今イチで、もうちょっと欲張ったところがあるべきではないか？高森君のはIdeal Villaとして扱いやすい形式を設定できたので、後が楽になったという感じで、そこそこに達者だが、もっとアトラクティブにもできたのでは？

講評

山下和正

現実的条件を何も与えず、理想の住居デザインを求める課題にしてはという私の提案を、八束先生が受けてくれた。ただ八束先生は狭義の設計だけでなく、それ以前の条件や建築のあり方(プログラム)に対しても新規性のある提案を要求した。さらに、その新規性のあるプログラムが、新規性のある設計の内容にかかわりをもつことが要求された。即ち、プログラムとその解決としての設計の両方に関連的な新規性が求められたという訳である。

案の定、学生諸君は大いに戸惑い、プログラム問題のためほとんどの時間をとられてしまい、建築デザインの内容の高まりにまでは手がまわらなかった。最近の若者の傾向から

●設計製図第Ⅳ：第2課題 八束はじめ講師

11月6日～12月6日

●課題要旨

「1,000坪の理想(観念)のヴィラあるいは最大限住宅」というテーマのもとに、既存の住宅の枠組みを越えたプログラムの設定からはじめ、それを前提に展開するデザインの提示を求めたものである。敷地などの具体的条件指定はない。

●指導協力

建築/トム・ヘネガン 構造/今川憲英

設備/彦坂満州男

して、このようなゲーム性のある知的操作の苦手の人が多いのは意外な気もする。与えられた課題からみれば、よくできた案は少なかったが、八束先生の熱心な指導もあって、良い刺激となったのではないかと思う。

講評

坂本一成

この課題は新たな住まうことの機能、プログラムを設定して、大規模住宅としてのリアリティーをどのように見いだすかというかなりむずかしいものであった。こうした課題はイメージを広げる構成力とそれをまとめる表現力が特に求められ、その思考の過程が学生のエクササイズとして有効と思われる。

陸鐘驍作品での物語り性とその表現は、実質的プログラムではあるが、彼の空間のイメージの構成力を的確に示した計画となった。和田裕作品は漁師の家というプログラムで海と一体化した居間場の構成が成功していると思われる。高森和志作品では都市公園に田の字に分割された全体配置とそこに成立する不思議な空間がおもしろく、興味をもてた。またその他、谷口知史作品、篠塚勉作品、渡瀬正紀作品が評価できた。



八束はじめ Hajime Yatsuka

1948年山形生まれ。東京大学工学部都市工学科大学院修了。

建築家、アーバン・デザイナー、評論家。

磯崎新アトリエを経て独立、現在(株)ユービーエムを主宰。

主な作品:アンジェロ・タルラッチ・ハウス(1987)。

粕江の家(1989)、花博フォーリー(1990)、WING(1991)。

主な著書:『空間思考』(弘文堂)、『ル・コルビュジエ』(岩波書店)。

『未完の帝国』(共著/福武書店)。

花博や熊本アートポリスなどではプロデュースも手がけている。

睡眠誘導術——最大限住宅プロジェクト

Reality——Dream——Reality

陸 鐘驍

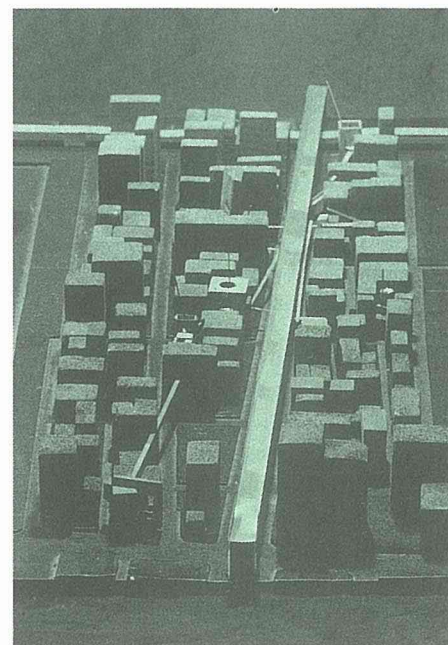
Sean Loh



S. LOH

■われわれは2つの三次元空間に生活している。現実——夢——現実のサイクルの中で、人間は常に移り変っている。しかし、この2つの矛盾する空間は、実は共存していることに気づいた人はいるだろうか。■このプロジェクトは以上の発想に基き、夢空間を現実へ転換し、併存させたものである。夢と現実の関係を新しいプロジェクトと既存街路の関係で表そうと試みた。■ここでは、安部公房の短篇『睡眠誘導術』を媒介として選んだ。人間が夢から現実へ脱走する物語である。既存都市の中に忘れ去られた上層隙間に「夢」の住空間システムを挿入する。玄関、

廊下、アトリエ、ランニングトラック、スポーツジム、ゴルフ練習場、茶室、書斎、そして、トイレ、居間、食室、プール、寝室など、住まいの装置を上層ブリッジで連結し、玄関と居間を除き、他の装置から下層へ戻ることは不可能とした。「夢」空間は現実寄生しながら、独立している。■いくつかの異なる夢をスーパーインポーズされた空間は、互いに現実の上層（あるいは深層）で衝突したり、融合したりすることによって、新しい「夢」住まいの町ができてゆく。■夢の境界は住宅の境界である。これこそ、最大限の住宅であろう。

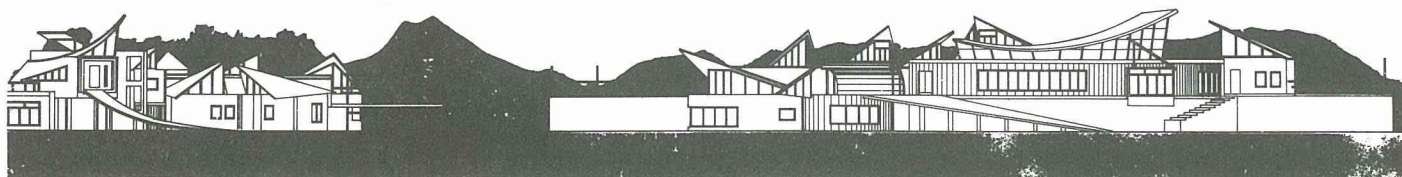
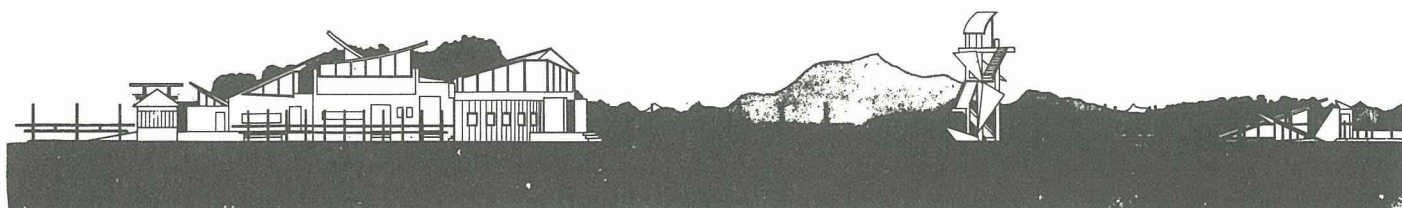
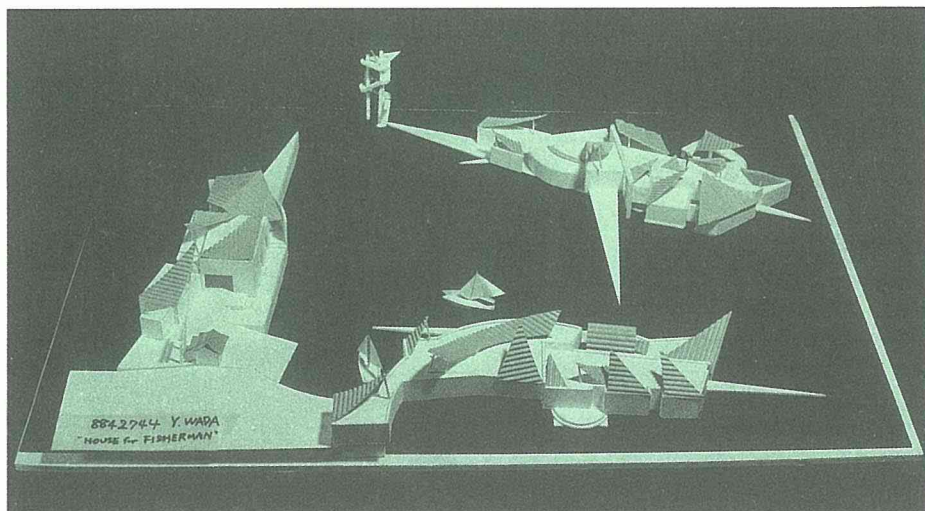


漁夫の家

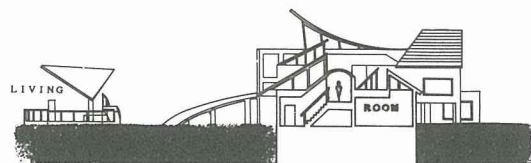
House for a Fisherman

和田 裕

Yutaka Wada



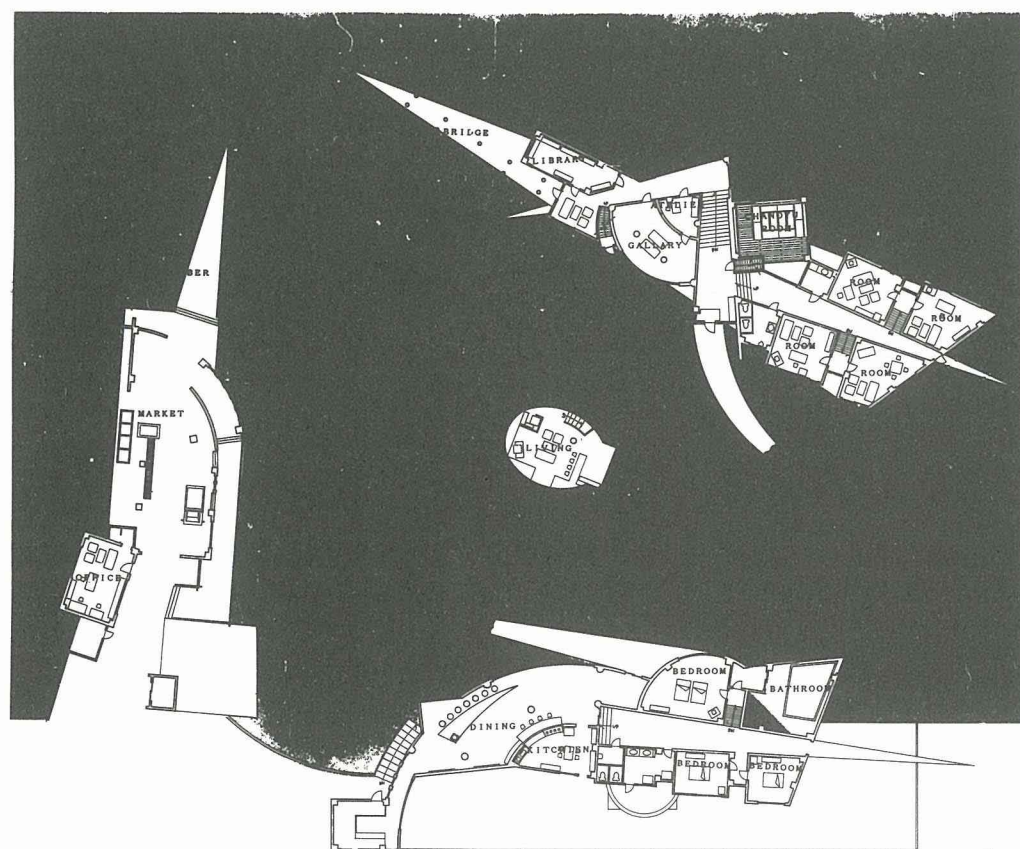
elevation, from living



section



section



plan

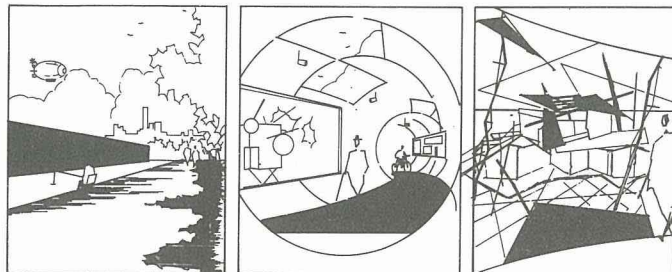
■漁夫の空間感覚には特別なものがある。極度に狭い、窓のない船室、そしてあの甲板に登ったときの、あまりに広大で空虚な空間。彼にとって寛げる居間とは、通常概念におさまらないのではないのではないか。（そもそも「居間」などという概念が日本にあったらうか）■ここで1000坪以上の「居間」を設定する。しかしこの「居間」に屋根や壁はなく、しかも海上である。壁（というより境界）として機能するのは、沖に定置された特別室や個室群、船着場や市場、事務所、そして食堂や風呂場等の重なりあう風景である。この海上に「水上室」が浮かび、自由に行き来する。■敷地は瀬戸内海の因島に設定した。この地方は潮の干満の差が激しく、3~4mにも及び、この自然現象により水上室からの風景に変化が生まれる。潮が満ちるにつれ、沖に浮かぶ島々が次第に浮かび上がってきて、ピクチャレスクな光景が展開する。

4人の芸術家のいえ 都市空間の中に存在するブラックボックス

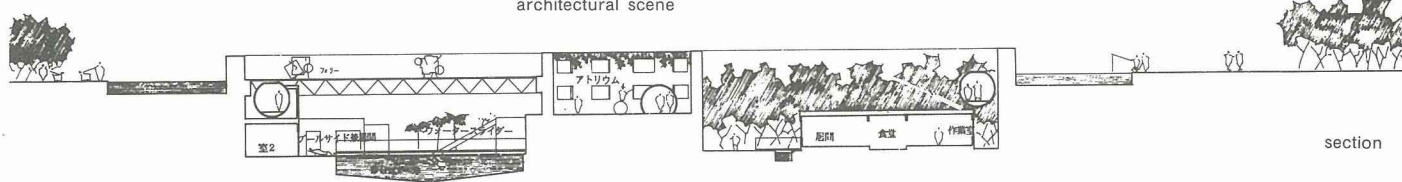
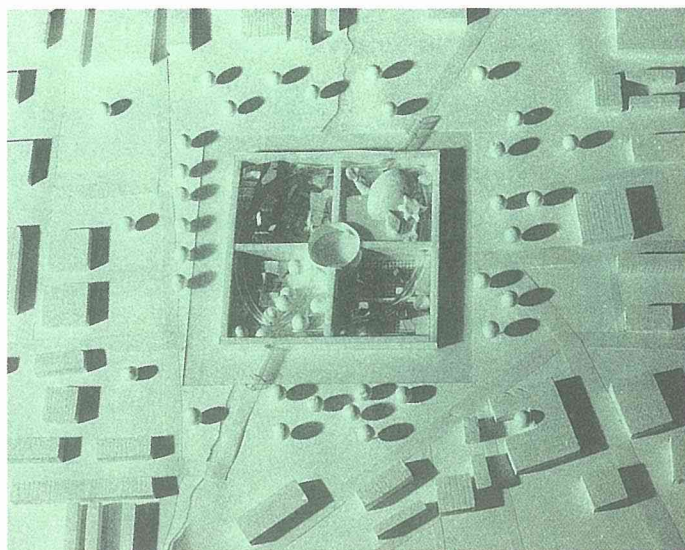
House for four artists

高森和志

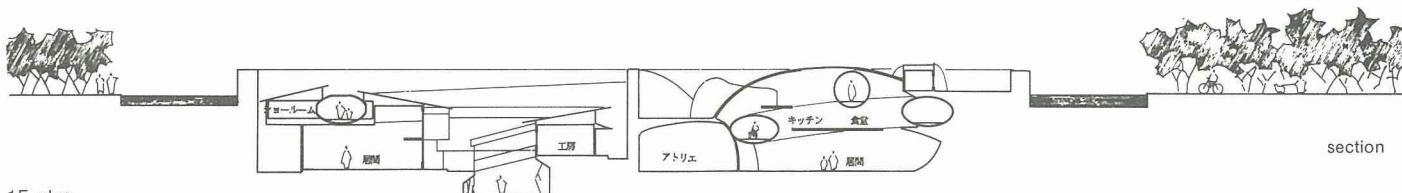
Kazushi Takamori



architectural scene

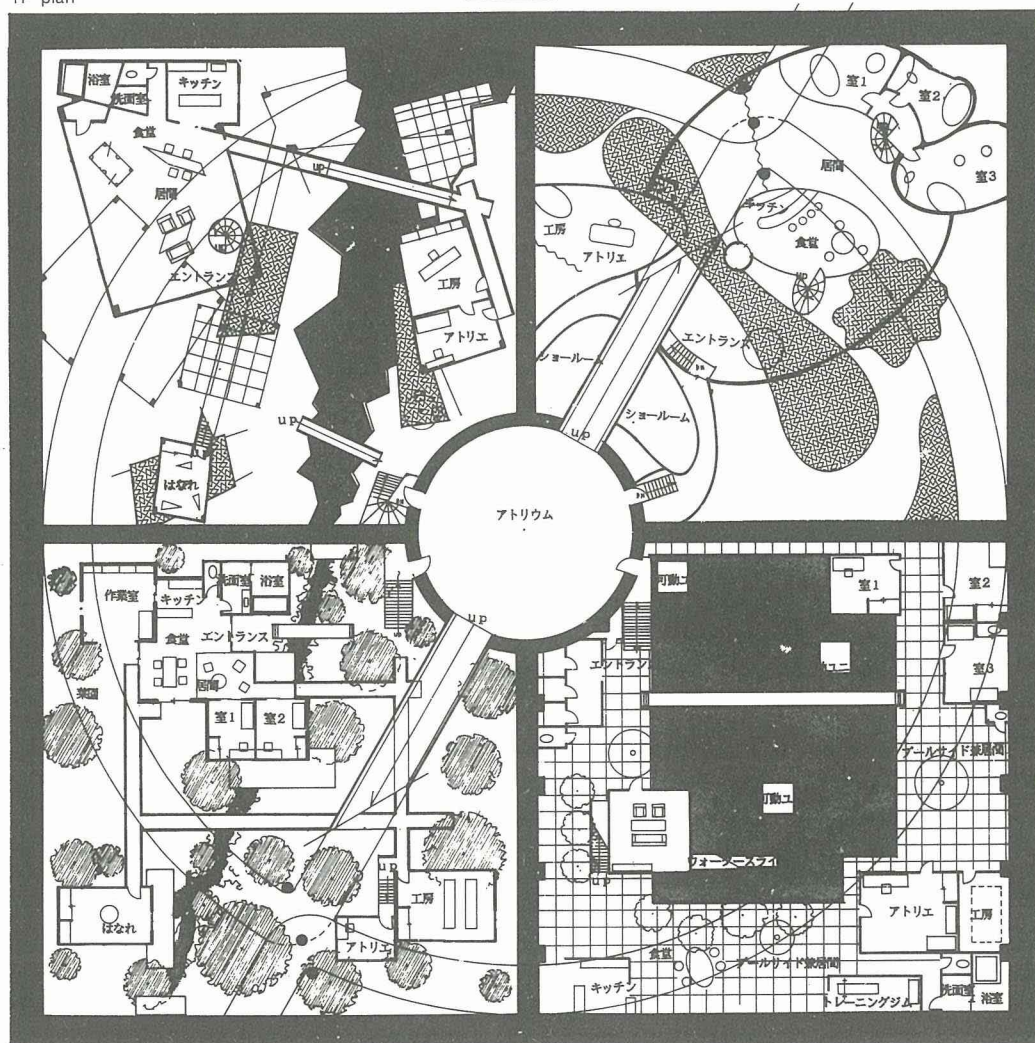


section



section

1F plan



■某都市の公園内に計画されたこの正方形の箱は、4人の芸術家のための住居である。箱はまず4つの象限に分割され、それぞれの象限が各芸術家のパフォーマンスの場として割り与えられる。遊歩道としてのチューブが箱に貫入し、各象限を巡回する。公的なものが私的なものに入る際に、境界面において情報の伝達が行われる。それぞれの芸術家はチューブが自分の領域を貫く際に、歩行者に対して芸術パフォーマンスを行うのである。■中央に設けられたアトリウムは、ロンドンやサンピエトロのような中世の集中式教会にみられる、コスモロジーとしての中央大空間を皮肉ったものである。外部からの視線をまったく排除したこの箱は、都市空間に存在するブラックボックスである。■異なる価値観の併存と異質物の貫入というイデオロギッシュなテーマに、住宅という表現手段をアイロニカルに用いることによって、かろうじて建築設計の課題に対する解答として成立している。

『都市の複合施設』

An Urban Complex

講評

林 昌二

だいぶ以前に、同じように設計製図を担当したときに較べて、今回は山下和正先生はじめ先生方の意気込みが見事で、やり甲斐のある授業ができて嬉しく思いました。学生が全員自宅ではなく製図室で机を並べて制作に当たったのも、構造・設備の先生方が講評に加わってくださったのも、当たり前と言えば当たり前の話かもしれませんが、とてもよいことでした。

全体として、難しい課題をよくこなしてまとめたと思います。住居部分に1/50を要求したのは、スケール感を身につけるためでしたが、果たして苦勞したようです。42人の作品が、全員あるレベルに達していたのは、机を並べた切磋琢磨の成果でしょうが、その代わり表現など全員が同じ手法になってしまったことはやや残念。関心が敷地の範囲に留まり、周辺環境を書いた人が極く僅かだったのはマスコミの悪影響でしょうか。

以下の3作品は、中でも光っていたものです。

寺崎さんの作品は、アトリウムを中心に、住居を南と西側に配置するなど、環境への配慮に苦心の跡がみられます。駐車場とランプにも、なかなかの工夫があります。時間をかければもう少し整理できたでしょうか。パースは適切でした。

高瀬さんは、建物の中央部を駐車場として東西端にランプを配置し、南側に住居を、北側にオフィスを配置するという、単純明快な構成で、表現も適切でした。ただ、どんなに分かりやすい構成だとしても、透視図は必要



でした。

中尾さんは、商業・業務・住居を下から上に積んで、明快な回答を示しました。オフィスはワンルームとし、サービス部分をすべて外部に取りつけたコンセプトがきれいです。住居が画一的だとの意見もありそうですが、こうした考え方もあると思います。

講評

山下和正

林先生の出された課題は一見簡単なようであるが、よくみるといくつかの難しいポイントが隠されているように思えた。業務空間と居住空間の複合のさせ方はなかなか難しく、いくつかの珍案奇案が現れた。

多くの学生諸君が、市街地ではまたとない好条件である、隣の公園との接点に何も関心を示さなかったのは驚きであった。また、オフィス空間というものを、あたかも機械の並ぶ工場の空間のように、無機的・否定的なものとして捉えていることにも驚きを感じた。なぜ人間の生活空間として捉えられないのだろうか。ついてながら、地階などの駐車場は、ほとんどの案が何らかの欠点をもっていた。

デザインアプローチの全般的な傾向として、スーパーストラクチャとしての存在のみが

●設計製図第Ⅳ：第3課題 林昌二講師

12月11日～1月31日

●課題要旨

東京の中心部である千代田区西神田の公園に隣接する約4,000m²の敷地に、延床面積20,000m²程度の、オフィスと36戸の住戸とを主とし、店舗を併設した複合建築を、異種用途の複合をテーマとして設計する。

●指導協力

構造／瀧口克己、小河利行、時松孝次

設備／後藤守一

強く意識され、体験的なスケール感、生活感からのアプローチやフィードバックは大変。ないように思われた。最後の課題のせいもか皆よく頑張った。

講評

坂本一成

学生が「建築設計製図」最後の課題としてどうまとめ、また現代都市の建築のコンプレックスをどう表現するかを期待していた。全体としては手堅くまとめた優等生的案が多かったように思われる。

寺崎徹作品は、建物全体の基本的骨組が明快で確かさをもち、またスロープをうまく使って全体を統合する、こうしたまとめ方が特に評価できた。高瀬有二作品は、建物中央部に駐車場とするかなり強引なプランではあるが、南北に、住居、事務所を配した図式的明快さによる平面配置が評価されたと思われる。中尾彰宏作品は、現代的構成法による空間の考え方が明快に示され、興味深い計画となっている。その他、陸鐘驍作品、高森和志作品を特に評価できた。



林 昌二 Shoji Hayashi

1928年東京生まれ。

日建設計代表取締役副社長、新日本建築家協会(JIA)会長他。

1953年東京工業大学(旧制)建築学科卒業。

同年日建設計工務(現・日建設計)入社。

主な作品：銀座三愛、パレスサイドビル、

ポーラ五反田ビル(1971年度日本建築学会・作品賞受賞)

日本IBMビル、日本電気本社ビルなど

主な著書：『建築に失敗する方法』『私の住居・論』

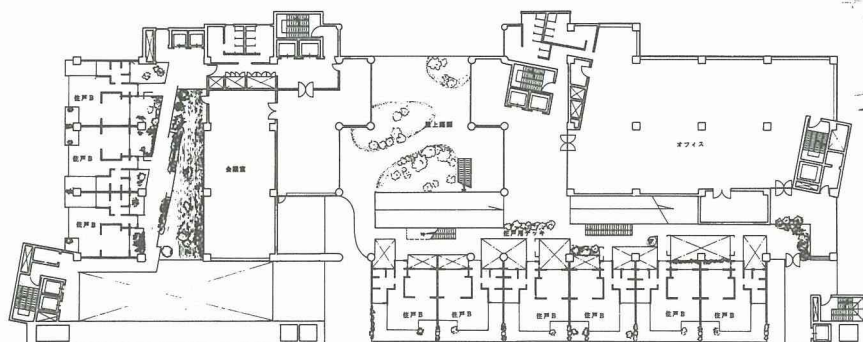
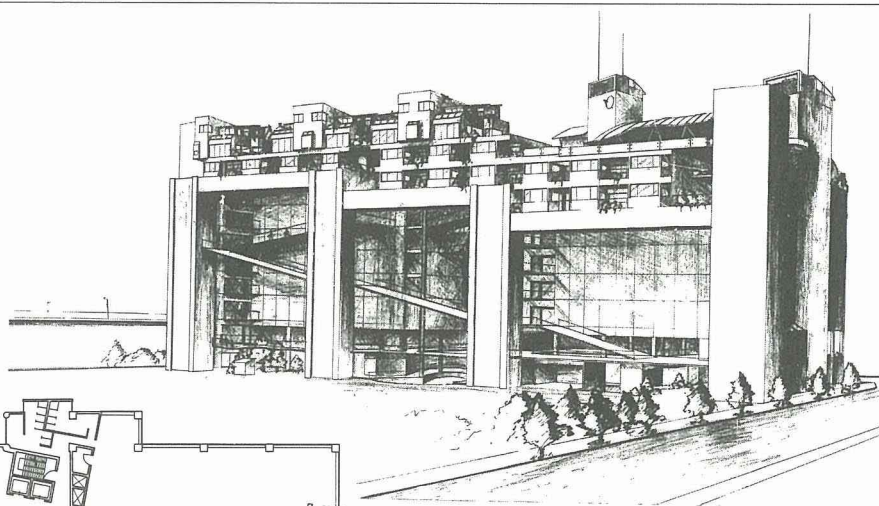
『オフィス・ルネッサンス』など

都市の複合施設

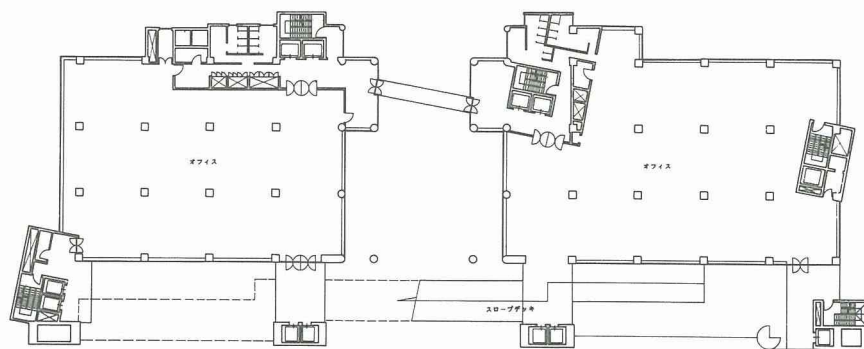
Urban Complex

寺崎 徹

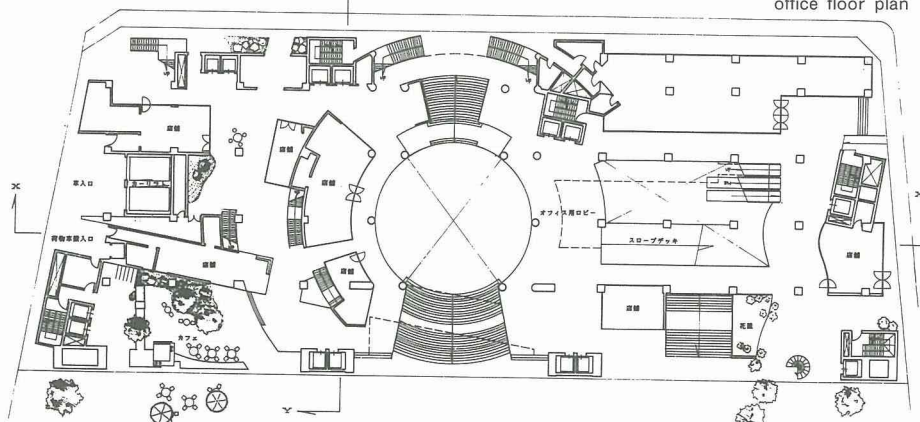
Tôru Terasaki



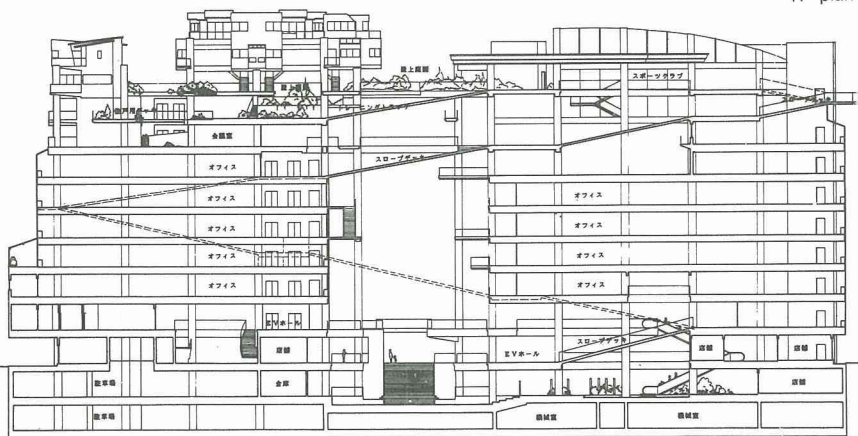
8F plan



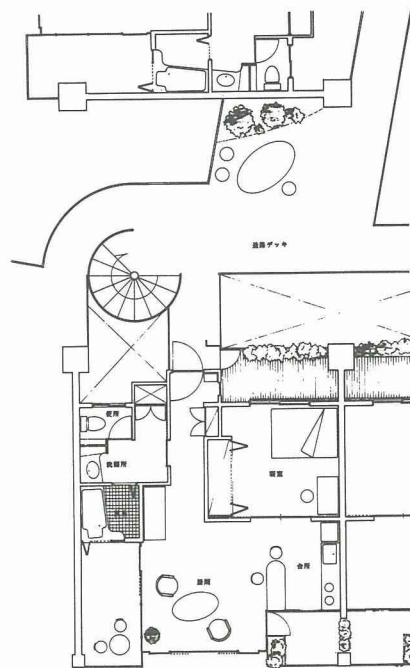
office floor plan



1F plan



x-x' section



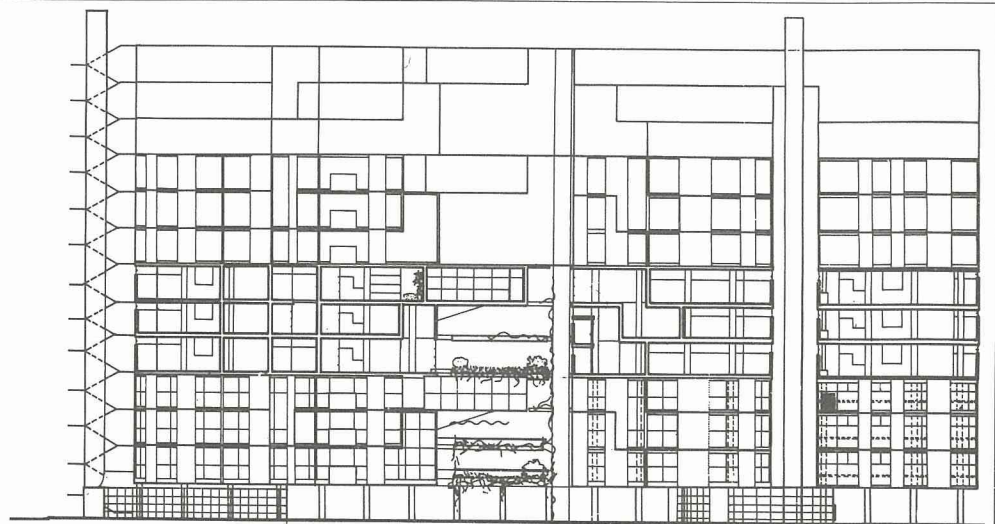
house plan

■この計画は都市に要求される住居、オフィス、商業施設をひとつの建築としていかに組み合わせるかを提案したものである。■建物は基本的に三者を上下方向に重ねた構成をとっており、相互の接点部では双方を並立、接続することで互いに連絡を作っている。そして建物全体を貫く装置としてスロープデッキを公園側に設けることにより、上下階間に新しい動線をつくり、相互の行き来をよりスムーズにし、上下方向の人の交流を盛んにすることを提案している。同時に公園側から見た場合に、この建物の上下方向へのつながりを視覚的に見せてもいる。■また住居部においては、各住戸へのアプローチとなる住戸デッキをその動線上で屋上庭園やスポーツクラブのトラック、展望レストランなどと接触させることにより、住居と他の施設とに共通の空間をつくり、住居群にさまざまな視点を与え、外部への広がりを与えている。

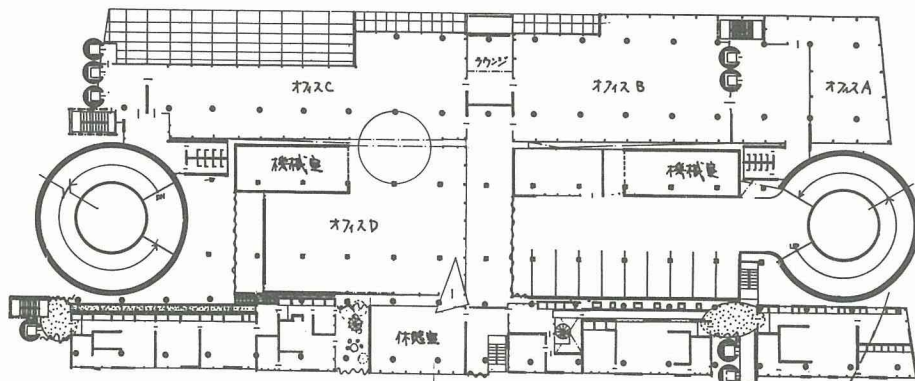
アーバモジュール

URBAMODULE

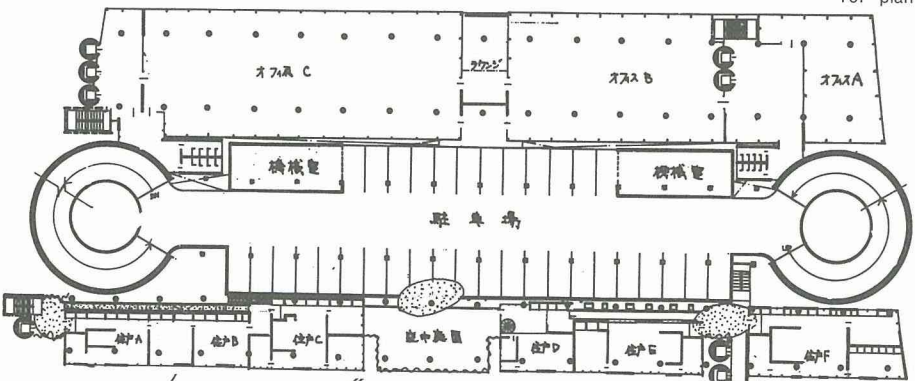
高瀬有二
Yûji Takase



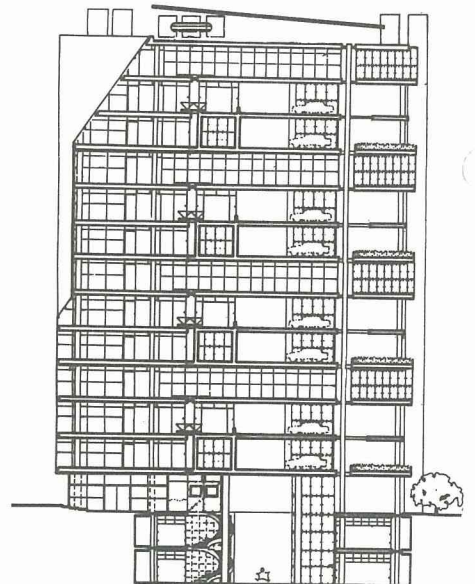
south elevation



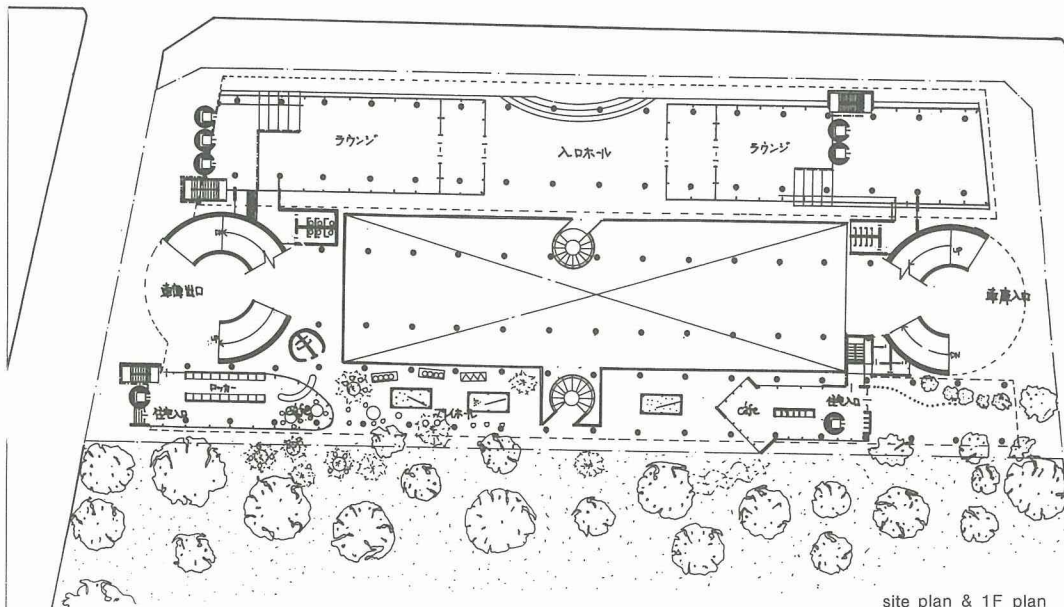
10F plan



2F plan



section



site plan & 1F plan

■このURBAMODULEは、現在の都市における、建築の在り方のモジュールとして提案された。

- ① 都市計画的視点（公開空地活用）
- ② 斜線制限の積極的建築表現
- ③ 駐車場の積極的活用

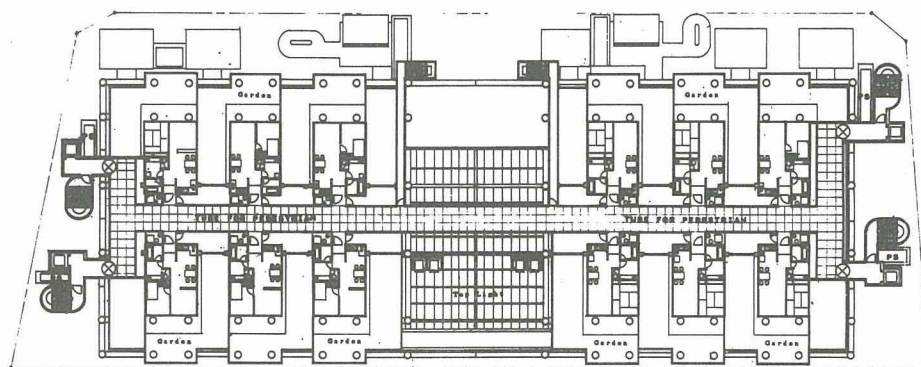
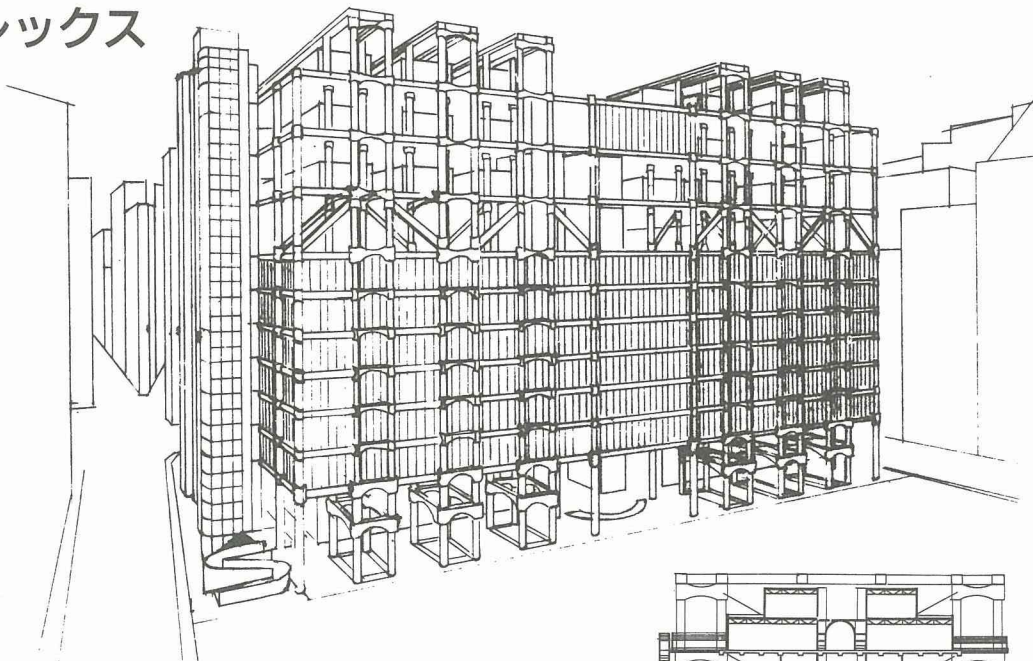
■1階は、等間隔のピロティで持ち上げられ、それぞれの機能へのアプローチ空間を除いては、公共（公園）に開放してある。基準階は、住宅、駐車場、オフィスを東西、リニアに配し、明確な機能分離を行うと同時に、最適な関係をもたせる事に成功している。また地下空間は2層掘りこみ、1階と合わせ3層の大空間を作り、その両面にテナントをくっつけるといった構成になっている。最上階には、スポーツクラブなどの都市的余暇空間が配されている。その他都市問題の両義的解決に成功。■これからの都市におけるプロジェクトは、このURBAMODULEの影響を免れないだろう。

アーバン コンプレックス

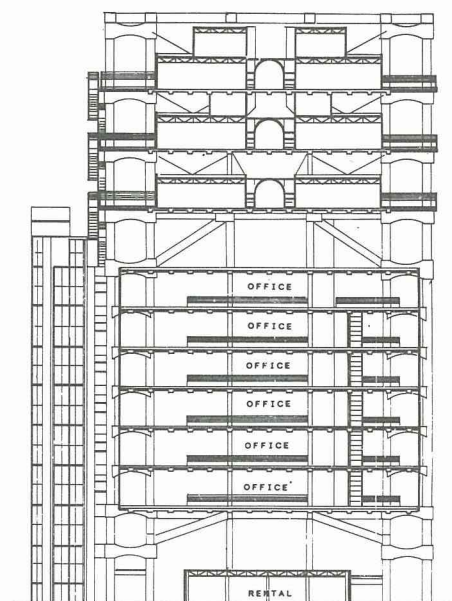
Urban Complex

中尾彰宏

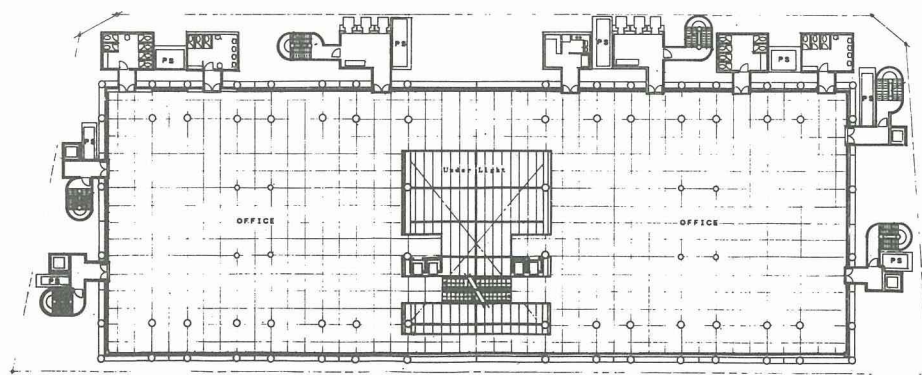
Akihiro Nakao



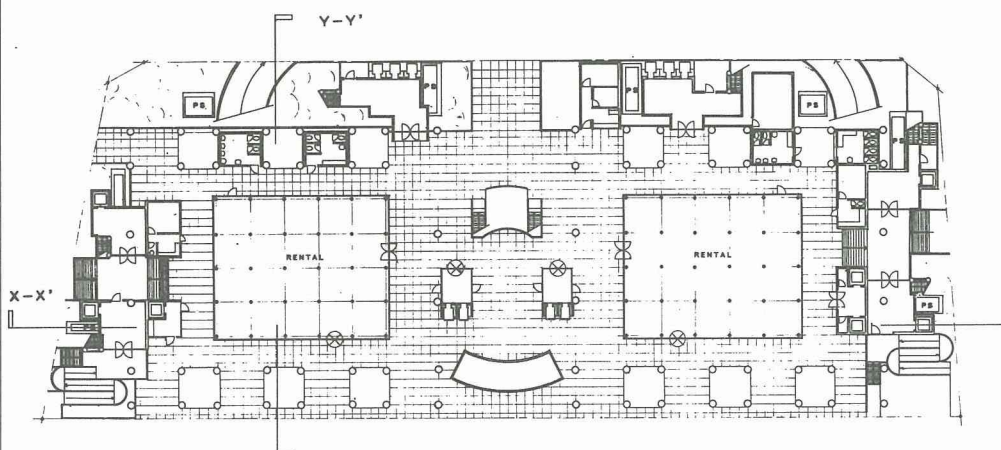
8F plan



y-y' section



2~7F plan



1F plan

■建築の複合化に際して、複合させることによって新たに得られる価値を見出し、表現することが必要となる。そこで、全体的に狙いとしたことは、異種建築間にすき間をつくり、構造や設備、そして計画全体に対して、変化の要求を受け入れる柔軟性を兼ね備えさせることである。■雑然とした密集地域に建つ一般的な集合住宅とは異なり、この建物の高層部分にある住宅群においては、オフィスの特徴でもある夜間人口の低下現象とあいまって、人と人との触れ合いが少ないため、プライバシーの確保という考え方に対して、新たなアプローチが必要となった。そこで触れ合いの場をトオリが担い、その両端に住宅が並び、向こう三軒両隣の町家形成をとった。■住宅は、内部が住人によって自由に取り替えられるプレハブ住宅である。また、柔軟性と明快さを狙いとして、垂直動線を主要建築物と独立に設け、オフィスと住宅へのアプローチの動線の分離を明確にしている。

1990年度卒業制作・修士制作優秀作品より

Outstanding works by graduating seniors & master course students

ここに紹介するのは1990年度の東京工業大学建築学科の「卒業制作」と大学院建築学専攻での「修士制作」の優秀作品の一部である。「卒業制作」は、前号で紹介した4年生全員による「卒業設計」につづいて、「卒業研究」として、4年生60名中8名の選択によって行われたものである。

また、「修士制作」は、大学院建築学専攻における「修士論文」として、修士2年生30名中の3名の選択によって行われたものである。なお、本年度の「卒業制作」、「修士制作」を選択した学生とそのテーマは下表のとおりである。

坂本一成

	氏名	制作テーマ	所属研究室	進学・就職先
卒業制作	秋澤 大	道路上建築計画	山下研	東工大大学院
	荒井 康行	CROSS GATE 臨海副都心コンベンションセンター	坂本研	大林組
	大垣 剛久	西国分寺駅南口地区住宅計画	山下研	博報堂
	片岡 信雄	東郷の森再整備計画	山下研	卒業延期
	塩田 洋	「BIO-RECYCLE」一都市と水際の新しい関係一	志水研	東工大大学院
	清水 英晃	P-TEN (天王州再開発プロジェクト)	山下研	大林組
	中井 邦夫	浅草リバーサイド・エア・ターミナル (ARAT)	坂本研	東工大大学院
	大藤 淳哉	NEW URBAN LANDSCAPE一渋谷 (公園都市) 計画一	坂本研	未定
修士制作	白川 悟	TOKYO MONORAIL 交通建築計画	茶谷研	熊谷組
	栗原 正明	HIROBA 一都市における複合建築一	坂本研	横総合計画事務所
	水野 元	参宮橋計画 一都市の領域と建築一	坂本研	磯崎新アトリエ

建築計画第2講座教授を拝命して1年経った。私の研究室の学生の卒業制作の指導の経験も含めて、今年度の卒業制作・修士制作の一般的な感想を述べてみたい。

- ・企画や計画地、与条件などの説明が不充分なものが多い。
- ・特に計画地の条件をよく読んで、そこから発想することがなく、単に地図上の位置を借りているのが多い。
- ・構造、設備といったデザインを支える技術にほとんど無関心で、流行の形態の安易なピーが多い。
- ・大プロジェクトが多いせいか、図面の縮尺が大きく、表現不完全が目立つ。主要データを表しているものはほとんどない。

つまり、論理性・ストーリー性はほとんどなく、工学的配慮に欠け、かといって大らかなファンタジーが感じられるといった風でもない。何かにつかれたような巨大複合プロジェクト指向のみが眼につく。すべてそうだというわけではないが、指導の至らなさを痛感している。

実はこのことは学科内でも近年の傾向として問題となり、論文を制作におきかえることの是非まで問われることとなった。私は意に反して必死に防戦する羽目になってしまい、やっとのことで認めてもらうことができた。今後はやむを得ないことだが、制作内容や提出形式の最低の基準を決めておかねばならないだろう。

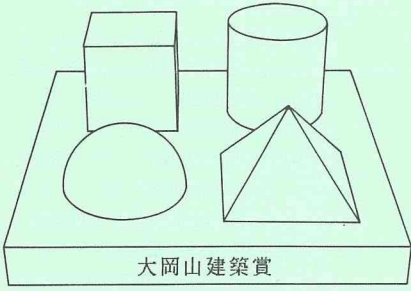
また私の研究室の場合であるが、学生諸君が制作途中のスケジュールをほとんど守れないのも驚きであった。結果的に内容不明確なまま時間切れとなり、十分な見直しもできず、そのまま奴隷 (下級生) 労働の作図作業に突入してしまったわけである。

時間的に余裕があると思って、ウォーミングアップのつもりでコンペなどをやっていたのがいけなかったかもしれない。今年こそは、数は少なくとも構わないが、しっかりとした取り組みのレベルの高い制作がチャレンジしてきてくれることを期待している。

山下和正

大岡山建築賞創設

The O-okayama Architecture Prize



大岡山建築賞

TIT 建築教育研究会の事業の一環として、卒業設計及び卒業論文・修士論文に代る制作に対する賞の創設が掲げられているが、平成2年度 (学年度) よりスタートすることになった。

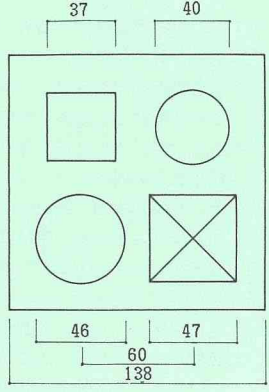
卒業設計は現状、4年生が前期に行う卒業設計製図 (必修) のほか、卒業論文に代わる卒業制作、修士論文に代わる修士制作があり、それぞれの部門に対し各1〜2点、毎年授与される。

賞は賞状と賞牌より成り、賞状は坂本助教授、賞牌は山下教授のデザインである。

●賞牌のデザインについて

賞牌については、著名なまたは本学ゆかりの彫刻家や陶芸家などに制作を依頼することも考えたが、予算枠の制約もあり、私がデザインをすることとなった。正方形の薄い台の上に4つの単純な幾何学形態が載っている。これは私から学生に捧げる贈物の意である。台の上の4つの幾何学形態は建築の基本となる多様なボキャブラリーを表していて、学生諸君がこれらの道具を自由に使って、何か新しいものを創ってほしいと願っているのである。なお、半球と四角錐はそれぞれ25cm³、円筒と正六面体はそれぞれ50cm³、正方形台は150cm³、合計300cm³の容積である。素材は真鍮材で、削り出し加工、金鍍金仕上、裏面に受賞者名等の刻字が施される。

山下和正



37 40

46 47

60 138

バイオ リサイクル

都市と水際の新しい関係

BIO RECYCLE

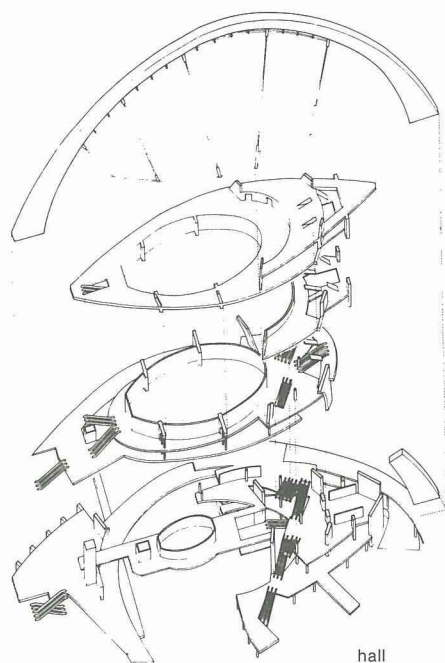
(1990年度卒業制作)

塩田 洋 (志水研究室)

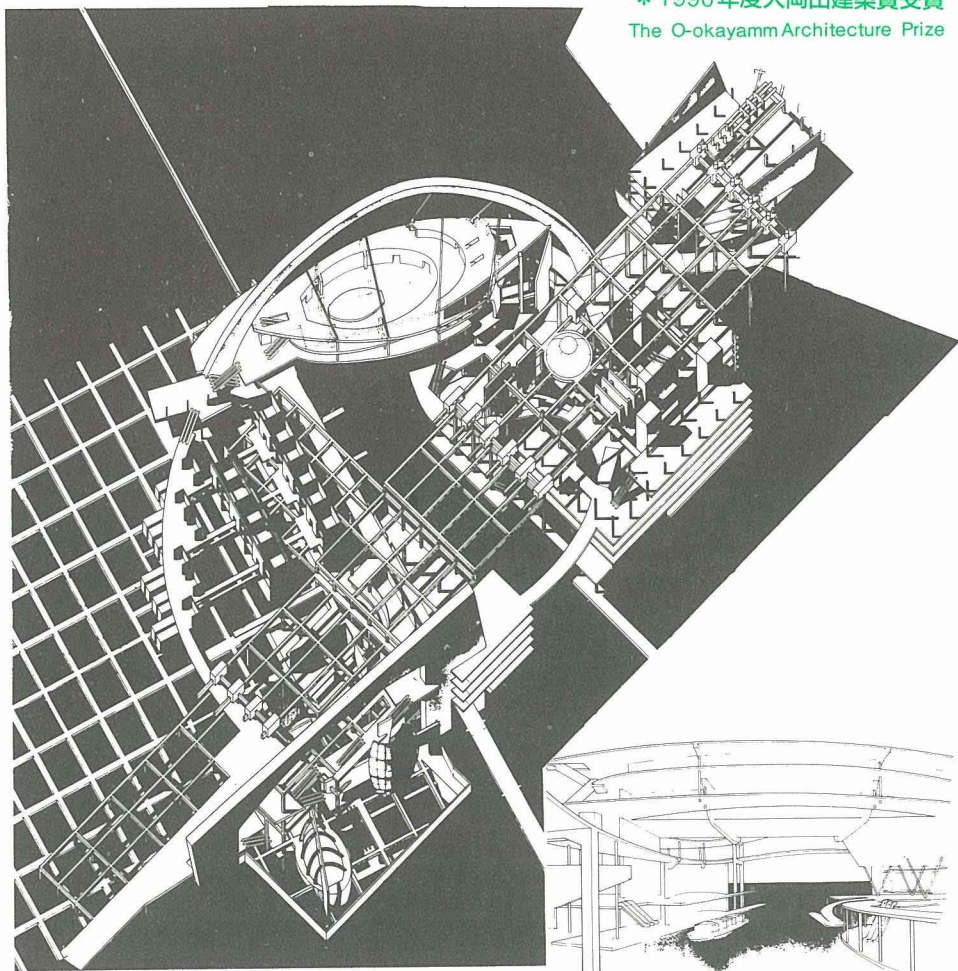
Hiroshi Shiota(Shimizu lab.)

* 1990年度大岡山建築賞受賞

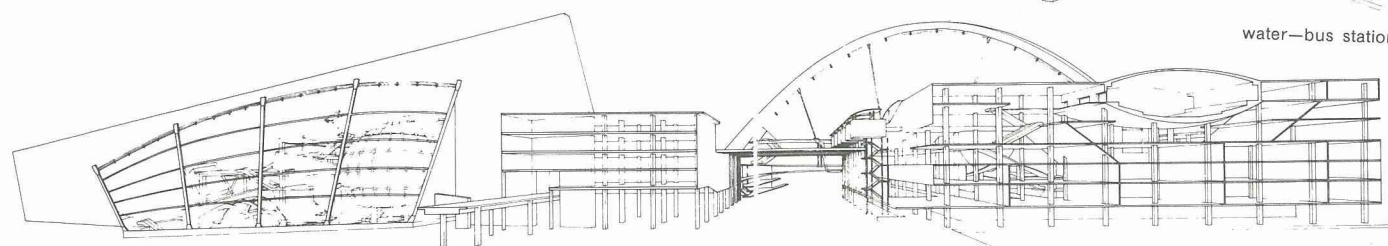
The O-okayamm Architecture Prize



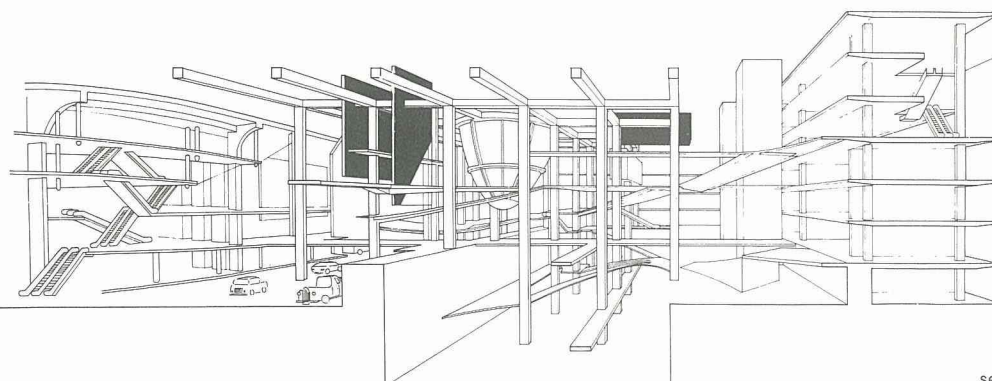
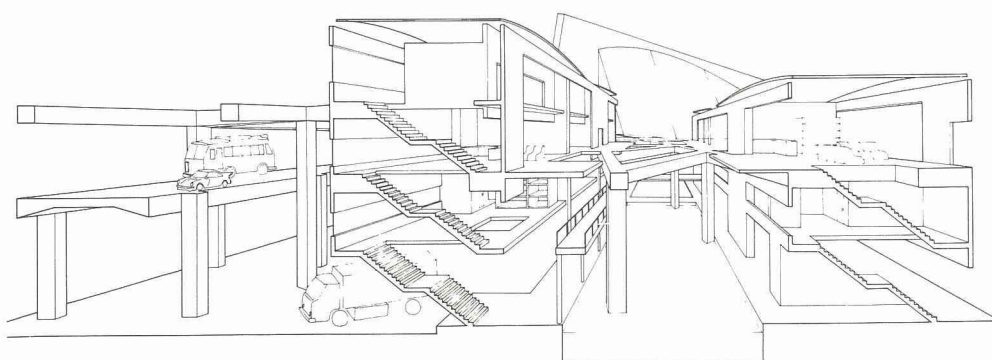
hall



water—bus station



section



section

■埋立地に建つ都市処理施設は、産業・生活の社会基盤として有効である。いっぽう空間・景観の面で、都市と水際の関係を隔絶している。また、この両者の関係は、都市生活を支える社会基盤のシステムと自然生態系との関係であるとも解釈されるだろう。■この計画は、夢の島周辺を敷地とする。ここには、江東清掃工場と新砂下水処理場がある。これらの施設を連結するように、廃棄物と下水の「複合処理システム」と、その処理水を用いて水産養殖を行う「生産システム」を計画した。この複合処理システムは、下水の水質浄化のための水生植物プールと、ゴミ処理の余熱利用施設からなる。■このような「計画」を背景とし、建築プログラムを「設計」するとき、2つのシステムに研究・文化施設を組み入れることを考えた。■以上より、都市と自然から新たに都市生態系を構想することにより、都市と水際の新しい関係が創出されることを期待する。

浅草リバーサイド・エアターミナル 〈ARAT〉

Asakusa Riverside Air Terminal

(1990年度卒業制作)

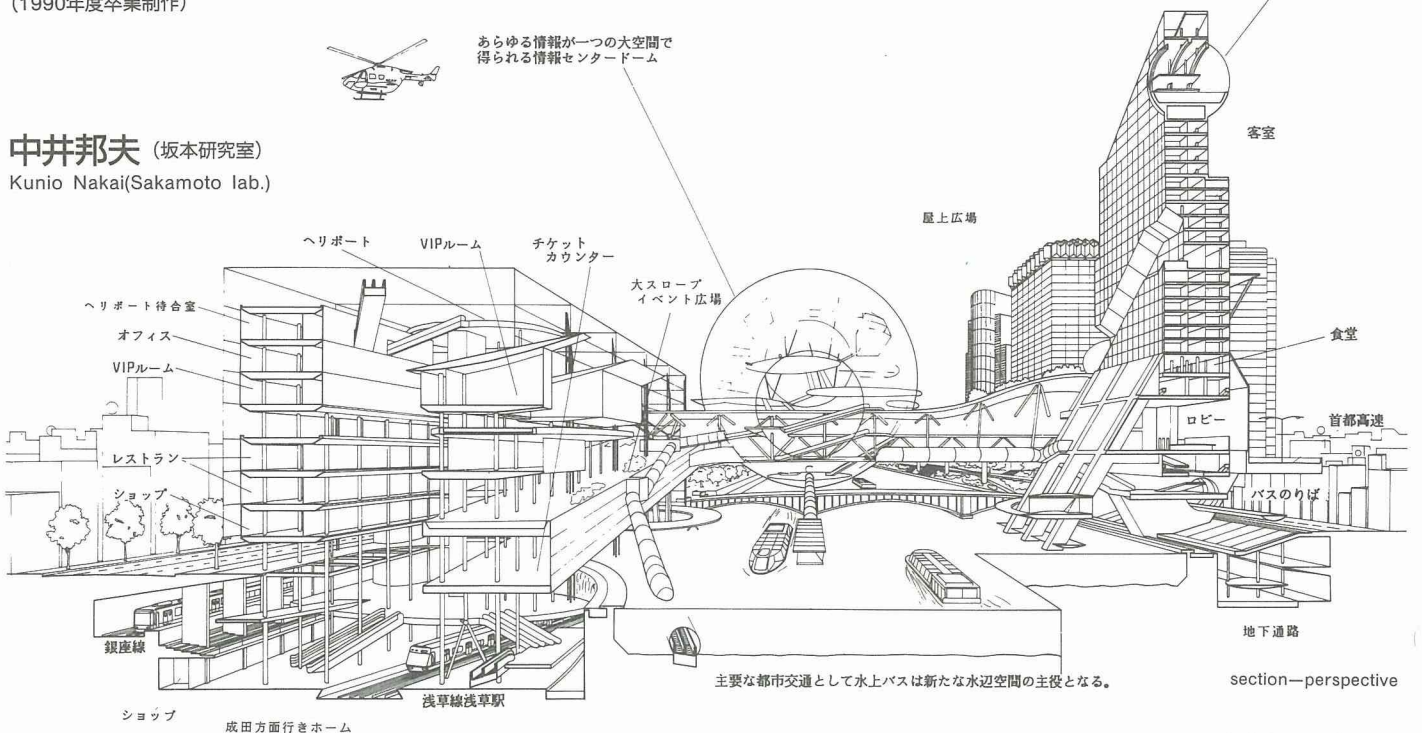
*1990年度大岡山建築賞受賞
The O-okayama Architecture Prize

東京・隅田川を一望できるホテルの展望プール

中井邦夫 (坂本研究室)

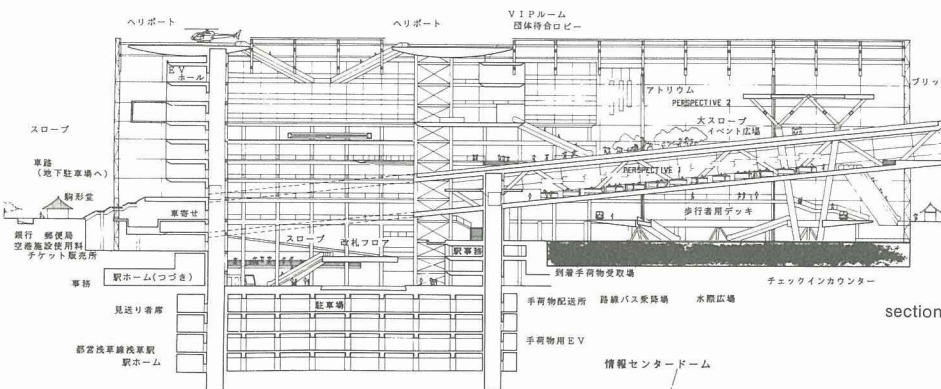
Kunio Nakai(Sakamoto lab.)

あらゆる情報が一つの大きな空間で
得られる情報センタードーム

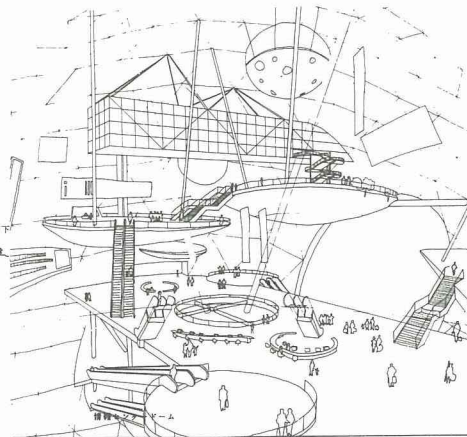


主要な都市交通として水上バスは新たな水辺空間の主役となる。

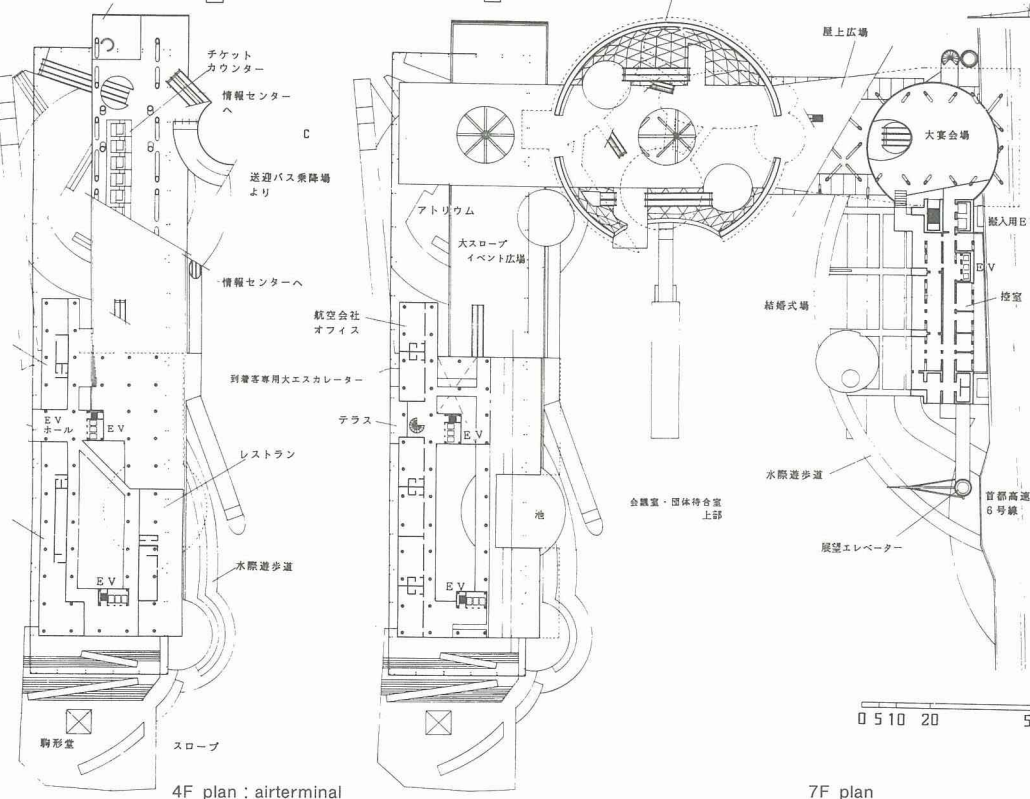
section—perspective



section



dome perspective



4F plan : airterminal

7F plan

■ポストモダンとは、建築が教条的なモダニズムから解放されて自由を得たと同時に、現代消費社会のシステムに組み込まれたことの宣言だった。あらゆる事物を取り込み、変化し続けること、それがこのシステムの本質だ。■ところで建築とは言えば、流行ものに異議を申し立てて正統な(?)ものを流行らせたいパラドクス。意味の無意味さを思い知って意味をなくそうとし、本当に無意味なものになってしまう虚しさ。「脱構築」を構築してゆく馬鹿らしさ。もはや、システムの歯車で終わるしかないのか・・・■何もそう暗くなることはない。システムはいつも開かれている。われわれがそれをうまく利用すればいいのだ。社会の状況に密着してそれを読み取っていくこと。うまく場所やうまく作動する部品を埋め込めば、全体の状況をも変え得るだろう。他ならぬシステムの力によって、建築とシステムの良い関係を考えていくこと。——さもなくば、狂人になるしかない。

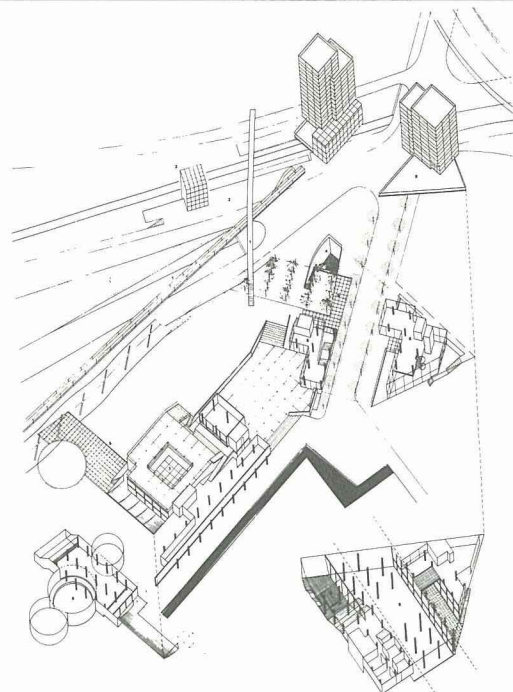
参宮橋計画——都市の領域と建築

Sangūbashi Project — Domain and Architecture of the City

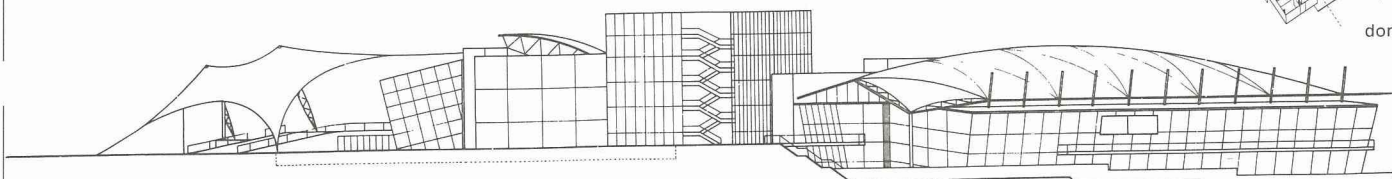
(1990年度修士制作)

水野 元 (坂本研究室)

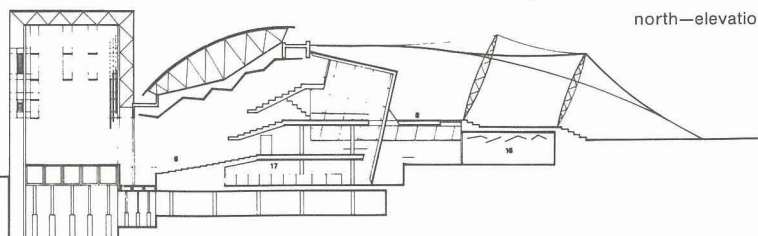
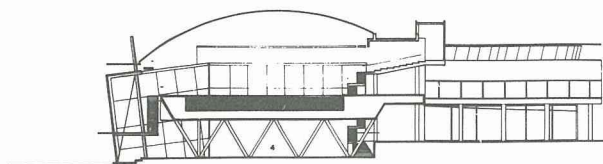
Gen Mizuno (Sakamoto lab.)



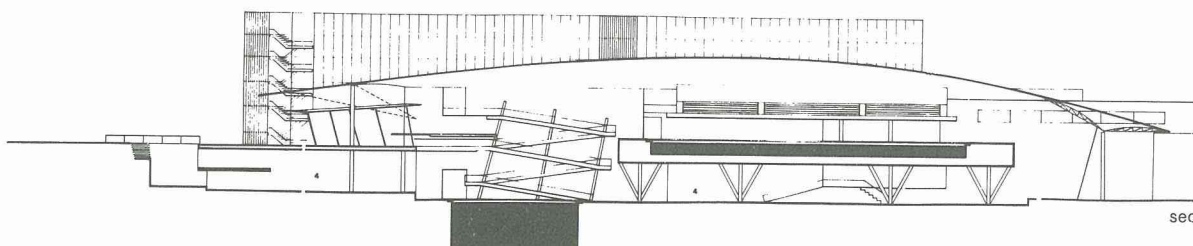
domain 1



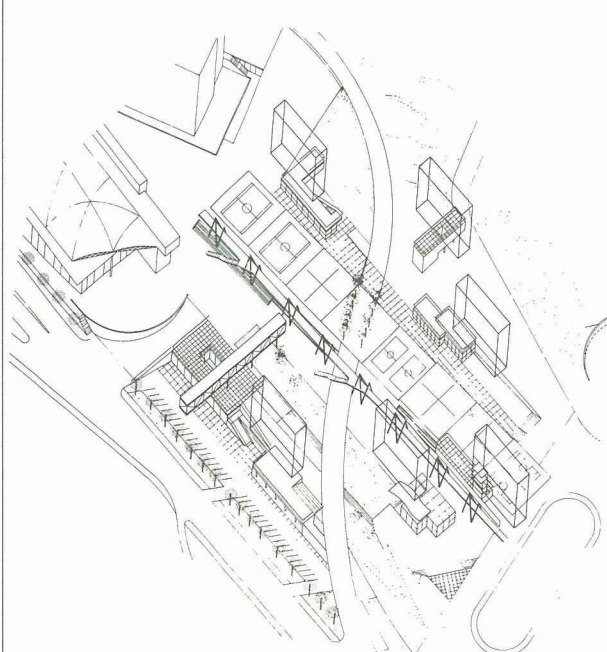
north—elevation



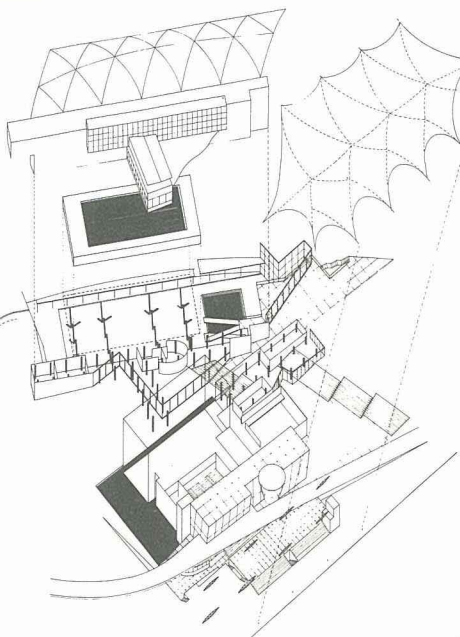
section of gymnasium—auditorium



section of gymnasium



domain 3



domain 2

■この計画は「領域の連鎖によって成立している都市」という考え方にもとづき、東京における都市施設を提案するものである。計画地は小田急線参宮橋駅前に広がるオリンピックセンター跡地とし、ここに文化研修施設を計画する。ここは代々木公園と明治神宮からなる公園地区と都市の一般街区の中間にあり、地形的に起伏の富んだ地域である。■施設全体は3つの領域に分かれ、それぞれ商業地域、公園、住居地域、という隣接する3つの都市のコンテキストと対応してデザインされ、全体としては既存の都市から公園への導入部となるよう計画されている。各領域とも性格の異なった外部空間をもっており、広場的な外部空間、内部空間的な外部空間、帯状の外部空間が連続的に展開する。■それは東京のもっている空間的性質をこの施設計画に応用したものであり、都市と建築の構造的な同質性を作ることによって都市の建築を作り出そうとしたものである。



←入学当初のクラスメイト。他に柳原政達、志水保一は戦線にあってこの写真には居ない。柳原は在学中に応召され戦死したから、卒業生の名簿にもない。

註1：西暦の紀元1年の前年はB.C.1年かも知れぬが天文学では紀元零年をおく。すなわち神武紀元元年はB.C.660年だが、それは-661年である。

註2：『……朕茲ニ米国及英国ニ対シテ戦ヲ宣ス。……国家ノ総力ヲ擧ケテ征戦ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ……』（原文抄）。漢文調『……朕茲ニ……』など日本人も読めない、チンココニと読む。朕というのは天皇の第一人称＝We。敵米英に示された英文は“……His Majesty, the Emperor of Japan clearly announces to you, that We are now at war with the United States and Great Britain. The entire nation will unite in its maximum strength; and you are expected to make no miscalculation in the achievement of the objective of war……”

宣戦布告の日本語の方はよくわからないが、英文にはmaximum strengthであるとか、miscalculationであるとか、私たちに親しみ深い単語が続く。clearly announce to youのyouは誰か。

私は神武紀元2600年の翌年に東京工大に入学した。西暦2000年をもって21世紀の始まりにするか、2001年をもって21世紀の始まりにするかは論のわかれるところであるが、私たちは神武紀元27世紀の第1年に入学したということにした。1941年4月1日のことである。今年1991年はそれからちょうど半世紀、入学50周年記念のクラス会を開こうと段取りをはじめた。老齢化が進んで卒業50周年記念パーティーに果して何人出席できるか、それが心配だと韓国にいる金亨杰（金村亨）がいう。

私は工大に入る前、東京美術学校を卒業した。美校の建築科は定員7人（現在の芸大は倍増して15名）のクラスメートのうち戦死3人。いま生き残ったのは2.5人。0.5は戦病で生環、養生がよいのでいちばん長命かもしれぬ。

美校に入学したのは1936年4月。その年の2月26日、陸軍青年将校によるクーデター。11月にはドイツと枢軸の同盟が締結されて、この国は急速に右傾する。1941年12月8日米英に対する宣戦布告^{註2}。そして戦局はますます緊迫。不急不要と目された美術学校には徴兵の猶予もなくなったが、未だ軍需に欠くことのできない理工系の学生には若干の徴兵の猶予が与えられていた。折角その徴兵猶予の特権を利用しようと工業大学へ再入学した。それでも本来なら1944年3月に工大を卒業予定であったが1943年の9月には繰り上げ卒業させられて、11月には佐倉の鉄道連隊に入営が決まった。

しかし、鉄道連隊でレールを担ぐのは私にできる仕事ではないと思い、海軍を志願した。同じ思いだろうか、同期のクラスメートの大半は海軍を志願した。学校で勉強してきた知

東京工大生だったころ——②

While at Tokyo Institute of Technology

私の学生時代

My Student Days

清家 清（1943年卒業・札幌市立高等専門学校長

Kiyosi Seike(1943graduate, President of Sapporo School of The Arts)

識も役に立つ海軍のほうがよからう。6ヵ月の繰り上げ卒業の代替に、6ヵ月の軍事学が課せられたと思えばよい。それに軍事学（naval engineering）に属する部分は工大で勉強したことよりも高い水準にあった。さらに自分でいうのも変だが、海軍には全国から秀れた学生が集められていた。こういう連中と6ヵ月のあいだ同じ釜のメシを食い、同じ部屋に寝泊りしたことになる。大学生活にも増してよい勉強をさせてもらった。特に被弾した戦友の軀^{ムクロ}を目のあたりにして文字通り死に直面した経験は今も忘れることはない。

今度の湾岸戦争はゴルバチョフ、サッチャー、ブッシュが相談した。太平洋戦争はスターリン、チャーチル、ルーズベルトの相談で終戦。アジアの東と西のちがいはあるが、何か似ている気がしてならない。

私の学生時代はそのような時代だった。



清家 清（せいけ きよし）

1918年京都市生まれ。東京工業大学名誉教授・東京芸術大学名誉教授。1941年東京美術学校（現・東京芸大）卒業。1943年東京工業大学卒業。終戦時は海軍技術大尉・海軍兵学校教官。1948年東京工業大学助教授。1962～79年同教授。1977～86年東京芸術大学教授。山梨県立宝石美術専門学校長を経て現職。主な作品：森博士の家、斎藤教授の家、私の家、小原流芸術参考館、軽井沢プリンスホテル新館など
著書：『バルテノン』『木組』『家相の科学』『やすらぎの住居学』など多数。

カオスの中の秩序

Order in the Caos

志水英樹 (建築計画第Ⅲ・教授)

Hideki Shimizu : Architectural Planning Ⅲ, professor

私の数年間のアメリカ留学中に、スランプになったり、ホームシックになったとき、急にこみあげてくるのは、渋谷の恋文横丁や新宿のゴールデン街の、まさにアジア的な迷路の中をしたたかに酩酊しながら彷徨する、あの「浮遊感覚」であった。

西欧の都市の中心には、必ずといっていいくらい、明確な輪郭をもつ「広場」という空間が、その都市の「顔」として、その都市独自の個性をもっとも集中的に表現している。いわば「ハレ」の場所としての「広場」がつねに明確な「形態」と「意味」をもって確立している。

いっぽう、日本の駅前広場はあくまでも自動車の動線処理のための広場であって、そこに西欧的な意味での空間性はまったく欠如しているといっていい。しかし、駅前広場から一歩街なかに入ると、そこには日本の日常生活のなかの「ハレ」と「ケ」の世界が、完全に混在する独自の中心地区を形成し、そこには空間の魔力とも魅力ともつかないエネルギーに満ちていることを認めざるを得ない。

日本の都市のもっとも極端な美と醜とをあわせもつ部分、もっとも日本的で、アジア的なカオスのこの部分が、やはり私に日本に帰ってきたという最大の実感を与えてくれたものである。と同時に、このような無限に豊かな「意味」に満たされている駅前地区が再開発される場合、たんにバスやタクシーの物理的処理のための交通広場の整備であったり、耐火構造化のための共同ビルの建設であったりするだけで、これらの「意味」が織り成す豊かなテクスチャーを無視してしまうとすれば、あまりにも淋しい。

「広場」という明確な「形態」と「意味」をもつ、西欧都市の中心性のあり方と異なって、一見カオスとも思える日本の都市の中心性とはどのような構造をもつのであろうか。これは西欧的な意味での「広場」というキーワードではどうにもならないし、「形態」という、



曲折する街路に現われては消えるヴィスタのシークエンス

もっとも直接的にデザインの対象となる側面からの切り口では、まったく無力であることを思い知らされるのである。

一見あらゆる夾雑物を飲み込んで、カオスともいうべき状況にあるこの駅前地区に対し、われわれ日本人が、それほど迷いもせず、むしろ快適でさえあるこのような状況の中に、もし「構造」というべきものがあるとすれば、それは地区の物理的構造そのものの中ではなくて、われわれの心の中にあるのではないかという仮説から始まっている。

都市空間の把握は、その全体を瞬時に読みとることはできない。体験される現在は持続性を有し、それはその内容とともに変化してゆく。都市内をかなりの時間をかけて、歩行し、移動し、体験して初めて、ある程度の理解に至る。都市のイメージは「記憶のゲシュタルト」と言いかえることもできる。記憶とは、過去から未来への一種のコミュニケーションである。したがって、たんなる過去の残影の受容作用としてではなく、あくまでも、未来への予感の投影としての能動的作用として理解されるべきである。

このような記憶作用を、能動的作用として理解したうえで、知覚や行動が、どのような特性をもっているかをさまざまな実体験を通じてさぐろうとしている。

一見、カオスのような都市空間において、その「わかりにくさ」を楽しむこともひとつの学習過程である。また、「整然とした美しさ」と「一様な退屈さ」、あるいは「多様な楽しさ」と「雑然とした混乱」など、きわどく分かれる評価構造もある。あるいは、常に曲折する街路空間に、現われては消えるヴィスタのシークエンスなどを通じて都市を把握することもある。ともすれば西欧的な美的基準に根ざした議論になりがちな、日本の都市や街並みの景観や空間構造を、より多角的にさぐってみようというのが、私の目下の研究テーマである。

暮らし・営み・ 設計

Living.....Working.....Design

建築計画第3講座 Architectural Planning Ⅲ

藍澤 宏 (助教授)

Hiroshi Aizawa, associate professor

私が専門分野としている地域計画、特に地域居住の視点から設計と研究を考えた場合、設計は研究の上位概念として捉えることができる。すなわち、すべての事柄を総合化し具象化したものが、設計であると捉えることである。したがって設計教育を考える場合、研究行為はもとより諸々の行為すべてがそこに投影されていなければならない。知識・技術・価値観・空間の認識、空間の在り方、手法などがそれに必要となる。さらに、日本人が培



ってきた空間の作法や暮らしから生みだされた空間を学ぶことも、設計に非常に大切なことと考える。現場から伝わってくる圧巻的な空間、巧みな空間の組み立て方など、日本文化の固有の空間ストックを設計教育に取り入れることも必要と考える。

昨年、愛知県西海町外泊集落に行く機会があった。世間に名の知れた石垣の漁村集落である。山の石を素材に、傾斜地に石垣で敷地を築き、石壁で屋敷を建てる。石垣で築いた段々畑、海からの風に耐え、暮らしを守る。これを含め、昨年、一昨年と南会津の中門造り、五箇山の合掌造り、桧原の兜造りなどを見て回る機会があった。いわゆる暮らしに根づいた住宅地である。生活にあった一寸の隙のない空間、先祖から長年培われた空間構成技術、技能がいたるところに配慮されている。知恵と文化、日本人としての豊かな空間の伝承、この価値を設計教育の中に生かす。豊かな空間を見る、聞く、触れる、これらを設計のなかに取り入れる。理論はもとより経験、即設計教育に必要不可欠な要素と考えている。

*50音順

成長する 夢

A Growing Dream

設計基礎講座 Basics of Architectural Planning

青木義次 (助教授)

Yoshitsugu Aoki, associate professor

建築を造ろうとする人の心の中に、ふたつのことが起こっている。どんなものをということとどんな具合にということ。前者は、夢を語ること、後者は現実はどう適合するかということ。たとえば、気持ちよく上れる階段にしたいというささやかな夢は、蹴上と踏面の寸法和が45cm位だと上りやすいという人体の生理の現実を知って、建築のひとつの形の決定につながるかもしれない。多くの夢があり、広い居間にしたいという夢のため上がりやす



い階段という夢を犠牲にするかもしれない。現実にも多くのものがあり、物理的法則はもちろん法律や人びとのくせや好みも、それが変更できない時は無視できない現実であろう。また、現実と認識されていないものが、新しい夢のもとで重要な現実になったり、その逆もある。先の階段の例でも、子供にとって快適であるべきという夢のもとでは、大人の生理の現実とはむしろ非現実になる。

学生に対して、建築設計の中でこうした夢と現実とを自分自身でどのように把握し判断したかを、意識的に対応してほしいと考えている。だれでもが気が付く現実を忘れないでほしいが、あえて常識的な現実を無視した学生には、無視していてもなお人に共感を与えるような壮大な夢を図面の中で展開してほしい。学生の抱く夢を良いか悪いかに判定することではなく、夢が現実の中で成長できるようにということを重視したい。

ビビッドな教育環境を提供したい

Creating a stimulating education

一般教育等・図学 Descriptive Geometry

坂本一成 (教授)

Kazunari Sakamoto, professor

建築設計製図の授業や研究室での設計活動を通して学生に対して願い、考えていることを述べてみたい。

まず、学生に建築への大きな興味と熱意、そして建築を創作することの喜びをもってほしいということ。そのことによって学生は建築がもっている世界の奥行きや深さを発見していくことになると思う。

つぎに、学生が自分たちがしている建築の設計の内容を相対化してほしいということ。



一般に学生の作品は多くの思い込みによってできている。このことは必ずしも悪いとはいえないが、そのこと自体を知らないことには問題がある。学生たちには知識、関心の広がりを求め、広い視野をもつことを望んでいる。

そして、学生たちがさまざまな刺激を受けて活発な活動をしてほしいこと。特に学生相互の刺激は、自分の学生時代を振り返ってみても、大変有効なことであったと思われる。また第一線で活躍している建築家との接触も大きな刺激になるとと思われる。

こうした学生への願いと合わせて、学生の作品の良いところ、面白いところを積極的に見だし評価することは、学生に活気を与えるうえで重要と考えている。そしてまた自身の活動においても、意義深い仕事をする事で学生にさらなる刺激を与えることができたいと思っている。

ここに述べたことはすべてあたりまえのことであろうが、これらが十分成立しているビビッドな環境を用意し、提供することができればと考えてきた。

古典の空間体系を基本に

Learning from the Classical Languages of Space

建築計画第1 講座 Architectural Planning I

内藤 昌 (教授)

Akira Naito, professor

大学における設計教育は、古典認識を前提とする全時代的文化表現を目標とすべきと考える。それはあくまで、歴史的オーソドクシーが求められ、決してアナーキーであってはならない。具体的には、現実の経済と機能を基盤とする空間表現の諸様式を文化様態に高める努力に学習の主眼を置くべきである。そこで将来の展望は、おのずと開かれるであろう。現時点のアナーキーは、近未来において俗物になる可能性を歴史は教えている。



私は、亡なる3ヵ月前の芸術会員・村野藤吾先生と建築学会の用事で対談したことがあった。その際先生は、学生時代徹底した古典様式を教育され、一時反感をさえ覚えた程であったが、そのいわば我儘を越えた30代から40代でようやく設計思想の骨格が形成されたと思うと述べられた。近頃はやりの「バブル(泡)建築」などは、単に流行として理解すればよく、決して大学教育でとり上げる必要はなく、短期に資格をとるための各種学校にまかせておけば十分である。

古典の空間体系を、単なる歴史的事実と捉えるのではなくして、時代を超越した文化と文明の技術として理解し、それを基本にして将来の建築像を構築させることは、少なくとも大学の建築教育過程においてのみ可能な学習形態と考える。

すぐには役立たない教育

Education should not be instantly useful

工業材料研究所 The Research Laboratory of Engineering Materials

和田 章 (教授)

Akira Wada, professor

建築は人間の培ってきた芸術、技術、科学の結晶であり、人びとはほとんどの時を建築の中やその周りで過ごしている。

普段の生活の中でも、外国の街を歩いているときにも、そしてすばらしい建築に出会ったときに、さらには建築の設計に関与しその建築が竣工したとき、私は建築学科を選択し建築を一生の仕事にしたことを最高の選択であったと改めて感じる。建築の教育に関して、教える側も習う側も、建築が好きであること



が基本である。

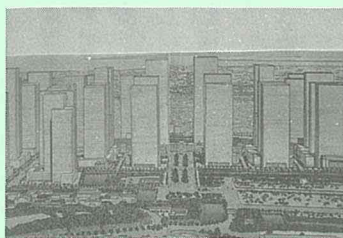
ウィトルウィウスが言っているように、建築の設計を行っていくにはありとあらゆることを知っていて理解していなくてはならない。工学はいきつくところ常識であるという考え方もある。優秀な建築家は、高いレベルの常識をもち、その上素質が必要であり、非凡な発想のできる能力も必要である。

大学の3年間で優秀な建築家を直接に生みだすことは無理である。私は、すぐ目の前の現実より高い理想を目指すこと、慌てて沢山の知識を頭に詰め込むより智恵のある判断と行動ができるように物事の仕組みを理解することが、優秀な設計者になるために重要なことであると考える。

変化は遅いようにみえても時代は移っていく。いつの時点でもゼロフェーズに戻って考えられる能力が必要である。

今回はその授業で課題となった「東京駅の再開発と保存」のレポートの講評ということで、2月21日においていただいた際の学生との質問会の様子をお伝えしたいと思います、何分話題が次から次へと移り、3時間にも及んでしまいましたので、ここではホンの一部になりましたがその内容をお伝えしたいと思います。
(文責：杉山俊一)

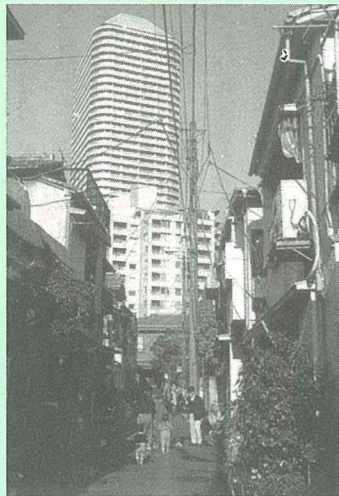
22



丸の内マンハッタン計画（三菱地所）



N. Y. サウスストリート・シーポート 後の超高層に容積移転をして手前の倉庫群を保全



東京・大川端リバーシティと月島の町



横浜・馬車道 保全と開発の調整で変化する街並



京都・町家の中にマンションが建っている



京都・古い家と新しいパーキングのアンバランス

わけです。あるいは虫喰い型の農用地指定地域では虫喰い乱開発が起きています。そのようなところでは農業構造も残しながら一体的に新しい土地利用になるように計画しなければいけないですね。その手法として集落地域整備法による集落地区計画をつかって計画的に整備することをやってみたいと思っています。

井上 農地を手放さない理由には、税に対する対策ということもあると思うんですけど、農振という制度が迷惑な農家もあるんですね。

奥村 こんなふうにならなくても制度が問題の後を追っていくものだからといったことが起こってしまうわけですね。制度がようやくできた頃には問題が別のところに移っていたりして…。僕は今総合設計制度のことを研究しているんで、そのことをちょっと伺いたいんですが、再開発も総合設計制度も新しい土地を作っている点では似ていると思うんです。ただ、総合設計はオープンスペースを確保しながら高層を作っていくというものですが、こういう制度自体が根本的にいいものなのかどうかという疑問はいつもあるんです。

伊達 それは制度の基から言うと、総合設計は敷地主義だからなんですよ。まわりが何であろうと総合設計制度は成り立つんです。これに対して再開発は原則として地域主義であって、地域計画を作ることが大前提

ですから、周囲とのバランスで決まっていくわけです。

司会 ただ概して再開発が画一的なものになるのはどういう点が原因なんでしょうか。

伊達 それが今言った敷地主義と地域主義という典型的な問題点ですね。つまり再開発は地域のレベルで計画しながら結局は敷地で採算を取らなければならないという前提から短期現場採算主義になっているわけです。それで高容積型の画一的なパターンになるわけで、つまりこういうシステム自体に問題があるんです。もっと低容積型で大きな開発があってもいいと思うんです。そのためには、コミュニティ・ファンドという地域としてつかえる基金のようなシステムがあれば、特定のところでは低容積、保全型も可能になるはずです。たとえば歴史的建造物の保全といった価値観を加味していく必要があると思いますね。

地域のもつ景観構造を読む力が欲しい

司会 日本の建築はずっと木造だった点が特徴ですが、都市でみた場合、日本の都市計画全般の特徴というのはどの辺にあるんでしょうか。

伊達 スクラップ・アンド・ビルドという性格がありますね。それこそ街全体が木造だったわけだから、ヨーロッパ流の保存論というのは根付きにくいという点があって、もっと

そういう意味での日本的保存論というのをとらえていかなければいけないと思うんです。

杉山 日本の都市計画ではヨーロッパみたいにまったく新しい都市構造に作り替えるということではなくて、伝統的な都市構造に乗かって再開発が行われているような気がします。

伊達 そう、広い意味では現況追認型という点はあると思いますね。最近読んだ雑誌に、景観の破壊はコミュニティの破壊だというフレーズがでていたんだけど、これは確かに正論だね。かつては景観というものを作っていたのはコミュニティなんですね。コミュニティの約束事が景観に寄与していったのかな。

藤原 京都の町屋で言うと、バッテリー床というのがあるって、夜は上げているんだけど朝になると椅子なんかを出して通りがかりの人が休んでいけるようになっているんです。で、そこは自分の家の前だからちゃんときれいにしているというような……。こういう生活がすごく景観に影響していると思うんです。

伊達 先日僕も京都に行ってきたんだけど、町屋がなくなってどんどんアパートが建っているんだよね。ところが立体駐車場、あれは町の構造も景観も破壊してどうしようもないね。コミュニティ論は地道でなかなか難しいから近ごろでは避けら

れがちだけれど、建築家は社会対応をしないで、敷地のなかでただいっしょうけんめいにデザインすればいいっていうものではないんですね。地域のもつ景観構造を読む能力が建築家には必要なんです。

司会 いままで行われてきた駅前再開発は、どの街にいても同じ雰囲気をもっていて魅力に乏しいと思います。しかし、そうすると次にでてくる手法は、地域性を伝統的な形態といった表層部分で表現する事例が安直にでてくる気がするのですが、将来的には、再開発のシステムの違いが大切で、それが計画に取り入れられていくことで地域の個性が現われてくると…

伊達 そういう時代が次に来るでしょうね。景観という言葉が流行しているけれど、表層のみかけの姿のことだと建築の人たちは思っているようですが、もっと生態学的に地域の風土や生活として深くとらえるべきものです。ランドスケープよりもランドシャフトというほうが僕は好きです。

司会 長い時間お話を伺ってきましたが、学生各自が自分の問題意識のなかで質問し、発言していくのは聞いていてなかなか面白かった。また機会があればやりたいと思いますのでよろしくお願いします。

藤江 日比谷のお堀端にある第一生命と農林中金の共同ビルの保存改築が進行中です。戦後の日本にとってある意味での歴史的建築であるこの建物を、どういった形で保存していくか、たいへん意味深いものです。私たちの案は一階部分を公共的な広場と考え、背後に高層の事務所ビルをたてる計画です。設計はケビン・ローチ氏と共同で行っています。なにしろアメリカの東海岸と日本との時差を利用すると24時間フル設計作業をすすめることができます。いっぽう、大阪の御堂筋でも、総合設計制度を利用して広い公共空間をもった建物をやっています。御堂筋にインパクトを、と考えています。

実際に図面を引かれるんですか。

藤江 いえ、今はもうしません。私の役目は建築系の責任者としてプロジェクトの進行管理と、主だったプロジェクトのデザインについてレビューしたりすることです。われわれの設計本部は全国を統括していますが、東京の建築系では大きく10部くらいに分かれていて、それぞれがまた3〜4グループから構成されています。ひとつのグループは10〜15人ぐらいなので、大きな仕事でもワッと一緒になって知恵を絞ります。

では学生時代についてお聞かせください。

藤江 学部2年の最初の製図の時に、清家先生が言われたんです。君たちは苦しくても学校で製図しなさい、そこに意味があるのだからって。そこで当時30人ちょっとぐらいのクラスのみんながワイワイ製図していると、先輩が来ていろいろアドバイスをくれたり、ケチをつけた

藤江澄夫さん(1960年卒)の オフィスを訪ねて

Visiting Mr. Sumio Fujie in his office

先輩、元気ですか②

Our predecessors, are you well?

りしてくれるんです。ちょうど志水先輩や山下先輩の頃かな。そうやって先輩や仲間から得た刺激は大きかったな。清家研を出てからもよく研究室の会があり、いいコミュニケーションができますね。

建築を目指したきっかけは?

藤江 中・高と青山のキリスト系の学校だったんです。クリスチャンではないのですが小さなチャペルでよく礼拝があって、その建築的な空間性と讃美歌の響きが胸に残っています。

影響を受けた建築家は?



セイコー大阪ビル



藤江澄夫

1935年生まれ。

1960年東京工業大学工学部建築科卒業。

1960年清水建設入社。

1970年カナダ、マントバ大学建築学科留学。

主として事務所建築の仕事を手がける。最近の主な仕事に「清水建設本屋」「新宿タワー」「セイコー大阪ビル」「有楽町一丁目プロジェクト」など。著者に『事務所ビル』（共著）。

設計行為とは相手に自分をアピールすること。



湘南台文化センター全景

最近の仕事をお聞かせください。

西村 この事務所に入って2年目に湘南台文化センターのコンペがありました。その時はまだ少人数だったので、全員で1ヵ月程やりました。そしてコンペに当選してからは、この事務所の中心的な仕事として設計、現場を通しまる4年かかって、昨年の7月に竣工しました。1期工事が公民館と子供博物館、2期工事が劇場という内容で、幸い最初から最後まで関わることができ、特に2期については直接担当をさせていただきました。

この仕事で一番感じた事は、仕事が大きくなるほど関係する人の数も増え、異なる立場からのさまざまな意見をひとつにまとめてゆくのが重要だということです。そのためには自分の考えをいつもはっきりさせておかねばなりません。たとえばオープン形式の劇場の提案に対して市民から強い反対があったのですが、それ^々結果として額縁の形が変わるプロセニ、ムカーテンの導入につながり、こ

の空間に新しい側面を生み出したと思います。

今は墨田区の文化学習センターに関わっていて、基本設計を終えたところです。湘南台と似た公共施設ですが、区の姿勢がだいぶ違っているんで、これからの実施設計に向けて多くの人と対話を重ねて、湘南台とは違った新しい可能性を探っていきたいと思います。

この事務所の特徴はコミュニケーションを大切にすることですね。

西村 私たちは建物の形だけで何かを表現するのではなく、その形と人との関係を重要に考えています。

では次に学生時代の思い出について聞かせてください。

西村 一番の思い出は3年の時の設計製図です。ちょうどその時、篠原先生が製図の担当教官になられて、伊東、香山、磯崎、倉俣、大高といった活躍中の先生方呼んでくださいました。そこで建築に対するいろんな姿勢を知ることができ

藤江 コルビュジェが好きでした。あのマッシュで絵画的な表現は、私たちに一番弱い部分かも知れせんね。当時の学生はモダン建築一辺倒でコルやグロピウス、ミースの数少ない資料をむさぼるように勉強しました。洋書の本屋が今度こんなのが出ると言え、ない金をやりくりして買う。で、その喜びが大きいんだ。当時は図書館も整備されてなかったしね。今の人は随分アメリカナイズされているようです。皆、買わずに貸りてきてしまう。(笑)物の溢れた時代で逆に変えてしょう。私たちはある意味で、思い入れとか集中力を養えたのかもしれない。ただ、西洋建築の根底に触れるような機会がイマイチなかったのが残念です。海外へは卒業して10年目で初めてカナダに行きました。その大学の先生の紹介でローチの事務所を訪れたことがあったんだけど、それがタバコ王の屋敷を買いとって改造した凄いものだったりして。彼の話を聞いて感激して帰ってきた記憶があります。その彼と20年後に一緒に仕事ができるとは。(笑)

最後に、今の学生に先輩のひとりとして言いたいことは?

藤江 大学での勉強が、社会に出てあまり役にたたなかったりします。でも、仲間たちとの切磋琢磨、刺激の掛け合いは後々の財産ですね。それと学生時代に惚れるものをもつこと、女性でもいいけ

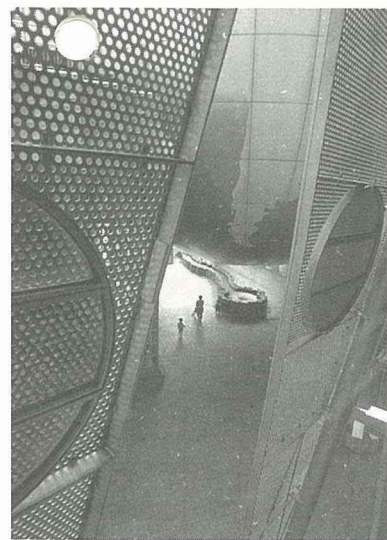
ど。(笑)特に建築家のね。一番好きな建築を、隅々まで見てみる、感じ取る。それを巡って仲間ととことんやりあうことです。うちのような大きな組織でも、中では一人ひとり、結構フリーだったりして、チームに託した仕事は彼らが思う存分に動かしていますよ。設計という行為は相手との関係で成り立ち進行するものですから、図面で表現するだけでなく自分の人間性や個性をどうやってアピールするかにかかってくるんです。

ありがとうございました。



第一生命ビル保存改築案

人との関係から出てきた形こそ大切。



湘南台文化センター

たと思います。また友だちともよくディスカッションをしていて、時には東大の仲間たちと建築家を招いてプライベートなレクチャーをしてもらったこともありました。

この事務所に入った理由は?

西村 学生の時代にアルバイトをしたいろいろな事務所のひとつなのですが、篠原先生の部屋とは対照的な雰囲気、別な環境という意味でおもしろいと感じたんです。また安定した大きな設計組織より、突出したものがつくれる環境の中に自分を置いてみたいという気持ちもあったと思います。

最後に今の学生がやっておいたら良いと思うことは。

西村 街を少し歩いたり、雑誌を見たりすると何でもある、という感じがするこの頃ですが、その中で自分のしたいこと、作りたいものを考えて欲しいと思います。そのためにたくさんのものを見たり、聞いたり、話し合ったりしながら積極的に動き回って欲しいと思います。

どうもありがとうございました。

西村博司

1959年生まれ。

1983年東京工業大学工学部建築科卒業、1985年同理工学研究科建築学専攻課程修了、1985年長谷川逸子建築計画工房入社、現在に至る。

主な仕事に「練馬の住宅」「湘南台文化センター」「墨田区文化学習センター(仮称)」。

先輩、元気ですか②

Our predecessors, are you well?



西村博司さん(1985年卒)を オフィスに訪ねて

Visiting Mr. Hiroshi Nishimura in his Office

1988年10月から1年間、私はドイツのフランクフルトにある、国立美術学校シュテューデル・シューレの建築クラスに在籍した。私にとって、単に建築の問題のみならず、建築を学ぶ環境のしくみや、それらを取り巻く社会や文化の問題にまでさまざまな示唆を与えてくれたこの1年間の経験について簡単に記したい。

*

どこの国にも、気難しい顔をした保守的な教授の居並ぶ退屈なアカデミーは存在する。ヨーロッパも例外ではないが、それらの上位に位置する建築デザイン専門の高等教育機関を有しているという点では、アメリカと共に他の文化圏を大きくリードしている。そこはアカデミーで基礎教育を修めた学生たちがより総合的な観点から建築デザインに専念する場であり、建築家をめざす学生たちにとってこういったデザイン・スクールこそ真の学習の場であらう。

ドイツの伝統的な美術アカデミーとし

シュテューデル・シューレでの1年

A year in STÄDELSCHULE

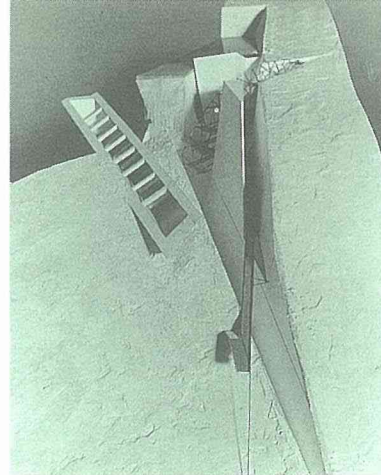
持田英明 (修士2年)
Hideaki Mochida, master course

て、退屈な表現主義美学の発信地でしかなかったシュテューデル・シューレが保守勢力を一掃し、建築学部長にあのピーター・クックを迎え、大幅な学内改革を試みたのが1984年、以来同校はロンドンのAAスクールやニューヨークのクーパー・ユニオン、ロスのSCI-ARCとともに欧米の進歩的なデザイン・スクールの一翼を担ってきた。

ヨーロッパの建築教育の特質は、その総合的な空間教育と徹底したスタジオ活

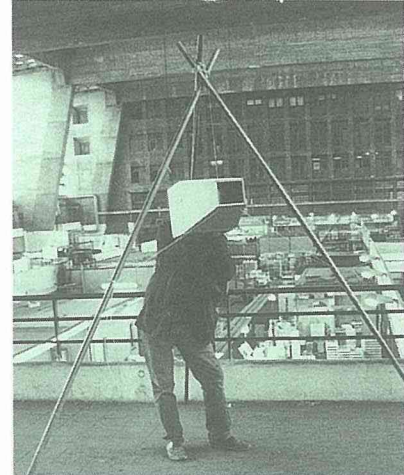
動にある。シュテューデル・シューレの正式名称は「Städtliche Hochschule für Bildende Künste; STÄDELSCHULE」, 訳せば、「芸術空間の構築のための国立の高等教育学校」ということになる。伝統的なマイスター教育の流れをくみ建築、絵画、映画の4部門各々に20名の学生という少数体制で、形式上は相互に独立しつつも、実際には部門間に壁はなく、相互に自由で活発なコミュニケーションを行いながら芸術空間に関する表現を学ぶ。この基本的な運営方針ののちで建築クラスのカリキュラムは定められている。私の在籍時には、ドイツはもちろん、世界12ヵ国から20人の学生が集い、活発なスタジオ活動が行われた。そこには時に大きな文化摩擦も生ずるが、まずそれを克服することが要求される。

スタジオは、プロジェクトとワークショップの2つからなり、ゲストの建築家によって頻繁に行われるスライド・レクチャーの他には一切退屈な講義はなく、建築家にとって必要なトレーニングに専念することになる。学部長であるピーター・クックのリーダー・シップのもと、



山岳地帯に水族館をつくるプロジェクト

その時々ゲスト・クリティックと共に課題を進めるのがプロジェクトであり、これがスタジオ活動の中心をなす。ヨーロッパの場合、基本的に課題数を少なくし、ひとつの課題を長期間に渡って徹底して考察し発展させていくのが普通である。私の在籍時にも前、後期各々ひとつずつの課題を学期一杯かけて行った。週2回平均でクックやゲストの建築家達によるチュートリアル（個人指導）を受け、クックと学生全員が輪になって行うソフト・シュール・ジュリー（小さな靴のような講評会）や、さまざまなゲストにアドバイスを受けるジュリー（講評会）が頻繁に行われる。1回のジュリーは、約10人に対して1日かけて行われる。とにかく、徹底して作品を語るのである。表現方法はいかなる形をとろうともその自由は保証されているが、いずれにせよ自分のコンセプトをいかにクリアに表現するか、そのプレゼンテーションのセンスとテクニックが問われる。平面図だの立面図だのとやかく言われないが、ただ一点、建築家にとって最も重要な3次元空間の表現をDにまかせるような不屈き者は



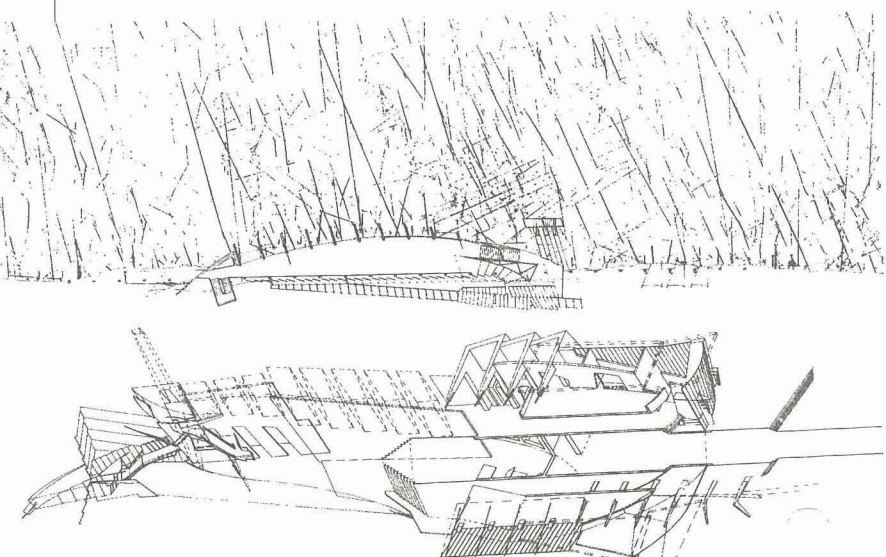
"Bird-Eye" 見る行為を見るためのプロジェクト

ひとりもいなかった。ロットリングとトレペだけで彼らはどんな空間も表現してしまう。建築家はまず職人であることが求められる。

こうした活動の合間をぬって短期間で行われるワークショップでは、建築と他のあらゆる分野との関係が考察される。ゲスト・クリティックの指導のもと、建築と写真やダンスとの関係、身体と空間、空間の映像表現など、あらゆる観点から空間に関する考察が行われ、模型作製や映像表現、パフォーマンスを通して表現することが求められる。日本では建築の形や構成の問題にされてしまった“ディコン”と呼ばれる一連の動向は、もともと建築というテキストに他の領域のテキストを重ねていくことによって古い建築概念を揺さぶるための試みであり、この



ジュリー（講評会）の風景



建築と音楽：セロニアス・モンクのスコアを建築に変換することから、建築と音楽の関係を考察

動きを生み出した欧米では確実にその成果を積み重ねている。こうしたデザイン・スクールにおけるワークショップ活動がそれらを支えていることは言うまでもない。

スタジオは学生のデザイン学習がさまざまな観点から有意義に行われるように配慮されており、以上の活動の他にも、他の国の学校のスタジオとのコミュニケーションを行うためにスタジオ・ツアーも行われ、異なる文化圏の学生たちとの共同活動が行われる。モスクワの建築アカデミーなどの“東”の学生たちと行ったスタジオはとても印象に残っている。このような経験を通して、建築のみならず国際的なコミュニケーションに関して

もトレーニングされたように思う。

こうした活動を通してわれわれ学生が学んだのは、建築をいかに語るかということ以上に、建築をいかに語らせるかということであったように思う。ロジックと形態という分離の思考は見られず、プログラムやロジックをいかに形態に昇華させていくか、そのポエティックを問うことであったように思う。もし、彼らの活動を単なるアートだとかたづけ、建築から追放してしまおうとする人がいるとしたら、それは皮相な見解の持ち主であろう。プロジェクトの過程でみせる、建築と都市や社会との関係に対する繊細さひとつとっても、彼らがいかに社会を認識して活動しているかがわかるし、日本

ではそのビジュアルな面しか紹介されていないが、建築として成立するかどうかに関するかなり厳しい技術的な指導もごく当然のこととして行われていることも見逃してはならない。さらに、こうした若い建築家たちの表現行為を育み、建築家独自の考察のスタイルとして許容するだけの濃密な文化的背景が欧米には整っていることも忘れてはならない。彼らも一度は、ロットリングを握る手で自動小銃を握り、徴兵制度を通じて社会的義務を果たしてきた学生たちである（欧米のデザイン・スクールの学生たちの平均年齢が高いのはこのことにもよる）。社会や制度とのつながりはよく承知している。自分たちの活動が、社会や制度に対する反抗ではあっても、決して社会に対して閉じた難解な議論に終始してはならないことをよく認識している。建築や空間を通して、建築家として、表現者として何を社会に投げかけていかなければならないのかを問っているのだと思う。

進歩的ではあるが、とても丁寧に本質的な欧米の建築家教育に接し、それを支える成熟した大人の文化をみように思う。私が全身で受け止めたのは建築教育のシステムの差以上に、その背景たる文化の差であったように思う。それを単純に“西洋かぶれ”とかたづけることもできるだろうが、文化を越えた共通性を把握すると同時に、現実存在する私たちの環境との差を認識し、私たちの現状を批評する意識をもつことも大切なことではないだろうか。留学の意義はそこにあると思う。



建築を、より建築的に思考する、という、多分にレトリカルな設定から考察をすすめてみよう。たとえば「建築」とは何を指してそういうのか、また、それを形容詞として用いて「建築的」とした場合に、いったいどういった方向に導かれてゆくものなのか、こうした論議はより頻繁に行われてよい、なぜなら、こういった問いを最終的に二分して換言すれば、社会が何を求めているのか、という設問形式と、自分が何を求めているのか、という設問形式に収斂することになるだろう。そのふたつの間を正しく峻別して認識しておくこと、それらを統合したものとして己の課題を設定しておくこと、が、こと建築に限らず、何らかの創造的営為一般に共通する態度であるように思われるからだ。

たとえば、課題講演会などの発表の場において、ここでのテーマは、とか、僕のやりたかったことは、といった口調を耳にすることが多く、とりわけ、優秀な学生の多くがその達者な案をこういった口調で説明する。自己の思いが絵筆に託せずに耳を切り落としたゴッホのように、彼が古典的意味での画家であるならばそれでよいかもしれない

い。芸術とは自己の表出であり、その点においてのみ存在価値を有するというわけである。

同様に建築を、自己観念によって思考し、成立させることは可能であり、あるいはそれだけで十分な場合すらあるだろう。ある意味ではそれは建築の王道のひとつである。しかし、その逆ではない。誤解を恐れずに極言すれば、絵画をはるかに凌駕するその物理的なスケールがゆえに他者の存在が不可避なのであって、先の学生の例は、それがどのように具体化されているのか、他者の判断はどうなっているのか、すなわち社会が何を求めているのか、について正当な思考がなされぬまま、自分が何を求めているのか、との自問のみが突出しすぎていて、あくまで個人的範疇に留まってしまっている。建築をより建築的に思考する、という冒頭のテーゼを、「建築」なるものを思考し、同時にそれを「文化」、「社会」あるいは「歴史」なるものの中に定位すべく思考する、と二重に読むならば、その後段が決定的に欠落しているように思えてならないのである。

おそらく建築は観念ではない、観念が建築を生むことはあっても、そうやって生まれだた建築が決して観念だけを表現しているのではない、眼前に存在する物体そのものこそが最も雄弁なる代弁者であることを、自戒の意味も含め、あらためて諒解しておきたい。



作品を発表する学生たち

'88—'89冬・夏学期に行われた主なスタジオ・プロジェクト

●テーマ	●クリティック	●スタディ概要
[冬学期 メイン・プロジェクト] 塔のための4つのスタ ディ 塔1 (広告塔) 塔2 (高層オフィス) 塔3 (高層アパート メント) 塔4 (高層文化セン ター)	メイン・クリティック：ピーター・クック ゲスト・クリティック： ロン・ヘロン、セドリック・プライス クリスティン・ホーレイ、リチャード・ロジャース ザハ・ハジド (以上ロンドン・マフィア) レビウス・ウッズ：ギンター・ブック 他	フランクフルト市内を走る路面電車の路線に沿って4本の塔を建て、同時にその都市デザイン的なネットワークを考察するためのプロジェクト。塔は、構造と内容の関係をビジュアルにスタディするための適切なテーマと考えられている。また、路面電車の路線に沿うことで、都市デザインの観点からスタディすることになる。最初のコンセプトの段階から、後半の発展段階まで、前期の5ヵ月を通してスタディした。
[夏学期 メイン・プロジェクト] 相対する2つのパビリ オンをもつ文化センタ ーのためのスタディ	メイン・クリティック：ピーター・クック ゲスト・クリティック： ピーター・アイゼンマン、バーナード・チュミ モルフオシス、クープ・ヒンメルブラウ ノーマン・フォスター 他	フランクフルトの市内に各自が敷地を選び、文化センターを設計するためのスタディ。相対する2つのパビリオンの構成を問うことが求められた。文化センターに関わるプログラムを組み換え、新しい文化活動の領域を構築していくことがテーマであった。
[ワークショップ] 空間と写真	ゲスト・クリティック： シンディ・シャーマン (写真家)	時間を止める写真というメディアを通じて、3次元空間と時間との関係を考察するためのスタディ。
Bodybuilding	ゲスト・クリティック： エリザベス・ディーラー リカルド・スコフィディオ	ルネサンスの身体モデル、機械時代の身体モデルに対して、情報化時代の今日の身体モデルを、パフォーマンスで提示し、身体と空間の関係を再定義するためのスタディ。
Machine-Dance	ゲスト・クリティック： ケン・カプラン、テッド・クルーガー	ダンスのパートナーを、機械のイメージに基づいて創造すること。学校のホールでダンスして回答した。
4インチ×4インチ×25	ゲスト・クリティック： レビウス・ウッズ	1辺4インチの正方形25枚の面積に、グラウンドという言葉から受けるイメージを絵画的に表現するためのスタディ。
Dimension of the City	ゲスト・クリティック： ナム・ジュン・パイク (ビデオ・アーティスト)	都市のもつさまざまな“次元”を、ビジュアルに2次元に表現するためのスタディ。

これら以外にも、スタジオ・ツアーの時のプロジェクト等があった。

TIT 建築設計教育研究会会則

会則の一部改正が2月1日の総会で承認されましたので、全文を掲げます。
第1条 名称
本会はTIT 建築設計教育研究会と称する。

第2条 目的

本会は東京工業大学工学部建築学科及び大学院建築学専攻における学生の設計能力の向上を側面的に支援し、ひいては優れた建築家を世に送り出すことを目的とする。

第3条 事業内容

本会は次の事業を行う。

- ①国内外の建築家・特別講師等の招聘
- ②卒業設計・修士制作への賞の授与と作品保存
- ③展示会・講演会等のイベントの開催
- ④総会・運営委員会の開催、機関誌等出版物の発行
- ⑤その他、本会の目的にかなう事業

第4条 会員

本会は本会の目的に賛同する個人または法人の会員によって構成される。会員個人または法人の拠出する会費を基金として本会を運営する。

第5条 会費

本会の会員の会費は10年間10万円とし、期間は1年以上6年間までとする。

第6条 役員

本会は次の役員を置く。

運営委員6名(運営委員長1名及び監査役1名を含む)

第7条 総会

会員(法人の場合はその代表)等による総会は年に1回以上開催するものとする。

第8条 会計

本会の会計年度は10月1日に始まり、翌年9月30日に終わる。また、会計報告は年1回会員に公表する。

第9条 存続期間

本会の存続期間は1990年10月1日より1996年9月30日までとする。

第10条 会則

本会則は1990年10月1日より実施する。本会則の改廃は総会の決裁を得るものとする。また本会則の運営にあたっては必要により別に細則を設ける。

●細則

TIT 建築設計教育研究会会則・第10条により下記のとおり細則を定める。

第1条 役員

本会の役員の構成は下記による。
運営委員6名(学外運営委員3名、学内運営委員3名)
運営委員の任期は3年とし、重任をさまたげない。

東京工業大学建築学科の学内運営委員は主任教授・建築計画第二講座教授・その他1名とし、また学外運営委員は会員または法人会員の代表者のうち、学内運営委員の合議により3名を選任する。

運営委員長(会の代表者)1名及び監査役1名は学外運営委員の中より運営委員の互選により選任する。

第2条 総会

総会は会員(法人の場合はその代表)及び東京工業大学建築学科教官(教授・助教授)の出席による集会とする。役員による業務報告、事業計画の審議、設計教育に関する意見交換等を行い、必要により会則・細則の改廃の決裁を行う。

1990年度会員追加・訂正
(社名、口数、本会への代表)

東京電力 1 大島郁夫(1959年卒) / セグ設計事務所 2 村上陽一郎(1953年卒) / 類設計室 2 吉川道夫(1963年卒) / 久米建築事務所 2 草壁章(1967年卒) 以上4社追加
熊谷組 佐藤文一(1944年卒) → 黒坂重蔵(1947年卒) に訂正

1990年度役員リスト

1990年4月以降、学内人事の異動により下記のように変更されました。

- 運営委員長 | 中島隆(1951年卒)
鹿島建設株式会社取締役 建築設計本部長、建設省建設審議会専門委員
- 運営委員 | 林昌二(1953年卒)
㈱日建設計副社長、新日本建築家協会会長
- 運営委員・監査役 | 戸尾任宏(1954年卒)
㈱建築研究所アーキビジョン代表取締役、新日本建築家協会理事
- 運営委員 | 山下和正(1959年卒)
東京工業大学教授、東京建築士会理事
- 運営委員 | 瀧口克己(1967年卒)
東京工業大学教授、建築学科主任教授
- 運営委員 | 未定(大学関係者分)

計画系人事異動

内藤昌教授(建築計画第1講座):1990年8月1日付で名古屋工業大学工学部建築学科教授と併任

茶谷正洋教授(建築設計講座):1991年1月1日付で一般教育・図学教授より異動

谷口汎邦名誉教授:1991年3月31日付で建築計画基礎講座教授を退官

坂本一成教授(一般教育・図学):1991年4月1日付で建築学科建築計画第2講座助教授より異動、昇任

第2回運営委員会の報告

1991年2月1日、中島隆、林昌二、山下和正、小野英哲、坂本一成の各氏出席のもとに開かれ、主に以下のことが討議、議決された。①会則の一部改正案について、②第3回運営委員会を1991年3月25日とする。

第1回総会の報告

1991年2月1日(金)午後6時~8時、東京工業大学百年記念館において会員33名、建築学科教官16名の参加を得て開催され、以下の事柄についての報告や意見交換などがなされた。①本会設立主旨説明およびその経緯の報告②事業



第1回総会

計画概略の報告。③会則の一部改正案の承認。④大岡山建築賞の制定の報告。⑤会の運営や会への要望、建築設計教育のありかたなどについての意見交換。

第3回運営委員会の報告

1991年3月25日、中島隆、林昌二、山下和正、小野英哲、坂本一成の各氏出席のもとに開かれ、大岡山建築賞の授賞式がおこなわれた。

大岡山建築賞決定

1990年度大岡山建築受賞者は以下の3名(4作品)に決定し、3月25日第3回運営委員会において授賞式が行われた。

●卒業設計

- 小林茂雄「水のある街」
(華No. 1, 8p)
- 塩田 洋「FISHERMANS' HILL」
——都市と水際の新しい関係」
(華No. 1, 9p)

●卒業制作

- 塩田 洋「BIO-RECYCLE」
——都市と水際の新しい関係」
(本号, 15p)

- 中井邦夫「浅草リバーサイド・エア・ターミナル」
(本号, 16p)

●修士制作

該当者なし

華ka No.2 1991年4月25日発行
発行: TIT 建築設計教育研究会

(事務局: 〒151 東京都渋谷区千駄谷2-10-7 山下和正建築研究所内)

編集: 山下和正・坂本一成・前田哲男・藤野雅統(東京工業大学工学部建築学科建築計画第2講座)

編集事務局: 東京工業大学工学部建築学科山下研究室内・市川玉枝

(〒152 東京都目黒区大岡山2-12-1
Phone 03-3726-1111 ex. 3167)

編集協力(有)松井編集室

取材協力: 建築学科3年生有志

Editor:

Yamashita studio, Department of Architecture and Building Engineering
Tokyo Institute of Technology
2-12-1 O-okayama Meguro-ku,
Tokyo 〒152

Phone 03-3726-1111 ex. 3167